

□字ツク 第 11 回本公演「荒川、神キラチューン」

□字ツク 第二回本公演

「荒川、
神キラチューン」

山田佳奈

【登場人物】

わたし

山辺

室

原

シヨーク

シオリ

百瀬

森田

遠藤

小林

水野

片桐

時田

蟹江

北条

柳下

マリナ

茅島

御徒町

【0】

舞台奥にはカラオケルーム。

劇場の上手側には学校机が置かれており、下手には学校の応接室。カラオケルームと応接室は客席側を向くようにソファアが置かれている。

顔が分からない複数の女子たちが現れ、彼女たちは無機質に動きながら会話を始める。そのどれもが他愛もない噂話である。

- ⑦ 「聞いてよー。アイツ、メール無視してんの。既読つかないの」
① 「まじで？」
⑦ 「ありえないでしょー。超むかつくんだけど」
⑦ 「全然話変わるんだけどさ」
① 「うん」
⑦ 「犯人捕まったらしいよ。荒川の」
⑦ 「え、どれー？」
① 「アレでしょ、自分の彼女殺しちゃったやつでしょ？」
⑦ 「彼氏、捕まったとき、ずっと泣きながら彼女の名前叫んでたんですよ？」
⑦ 「でも好きすぎると殺してやりたくなったりしない？」
① 「それまじ怖いー」
- A 「ねえねえ、3組の子から変なこと聞いちゃった」
C 「え、何？」
A 「あの子の家って変な宗教やってんでしょ？」
B 「まじで？」
A 「水売ってんだって。宇宙の水」
C 「宇宙に水なくね？」
A 「コンビニのよりめっちゃ高いらしいよ。ヤバくない？噂だけど」
B 「ねえ、だからあの子いなくなるの？」
C 「あの子、ヤバいわ。やっぱ」
A 「言えてるー」

カラオケのモニターに文字が映し出される。

おやすみなさい、おはよう。

いっそ世界なんて終わってしまえばいい。

今まで何度もそう思った。でも世界は終わらない。
ほれ見たことか、
神様なんていないんだよ。

制服姿の地味な女子（以下、シヨココ）がカラオケルームのソファに座る。

遅れて春物のコートを羽織った女性（以下、母）が渋谷の前に座る。
母は煙草に火をつける。

シヨココ「何で？」

男がカラオケルームに入ってきて、メロンソーダの注がれたグラスをシヨココの前に置く。

男 「お待たせしましたー」

母 「これからあなたは渋谷に苗字が変わるよ」

男 「ごゆっくりどうぞー」

男が部屋を出て行く。

スーツの地味な女（以下、わたし）が客席から舞台を眺めて立っている。

わたし「このとき、ほれ見たことか、って思った。やっぱり神様なんてどこにもいない。母親から学校帰りにカラオケに呼び出されて、微妙に炭酸の抜けたメロンソーダを目の前に思った。何で。そんなのはデタラメで全部わかって、敢えて、何で、なんて言ってみただけどやっぱり母には届かず、次の日にはわたしは渋谷さんになって、中二の終わり、わたしは新しい学校に転校した」

母は煙草の煙をくゆらせながら部屋を出て行く。

入れ替わりに学生服のクラスメイトたちがバラバラと登場し、シヨココを囲んで座る。

クラスメイト⑦「えー、今日の終業式をもって二年生を終了します。みんな来学期から三年生だよ。ラスト一年、まじで最高の思い出作ろうね。で、実はこのタイミングでシヨココちゃん

が転校することになりました。シヨコちゃん一言お願いします」

シヨコ「(マイクで) ……えっと。ほんとに、ありがとう。みんなのことは忘れないし」

クラスメイト④「(渋谷の言葉を遮る) 忘れないよー」

シヨコ「(マイクで) もしもわたしが死なずに生きてたら絶対漫画家にな

って頑張るんで」

クラスメイト⑤「(渋谷の言葉を遮る) 寂しいよー」

シヨコ「(マイクで) そのときはお願いします…」

クラスメイト(全員)「いええええーいーいー」

シヨコ「(マイクで) 絶対お願いします」

クラスメイト(全員)「いええええーいーいー」

音楽が大音量で鳴る。

それに合わせて、わたしは歌をうたうように胸の中にある言葉を吐き捨てる。

わたし「(マイクで) いつもそうだ。神様はわたしのお願いは全然聞いてくれない。全部無視。そんな神様じゃない。むかつくむかつくむかつく。そもそもこんな大事な話をするのに何でカラオケなんだろう。

煙草くさいし、隣の人の歌は下手くそだし、部屋は狭いし暑いし息苦しいし。そう、14年前、ノストラダムスの大予言で世界が終わるとか思われてたあの時、中学生、超思春期を過ごしました」

クラスメイトA「えー、今日の始業式をもつて新しい生活が始まりました。

みんなついに中学三年生だよ。ラスト一年、まじで最高の思い出作ろうね。実はこのタイミングで、渋谷シヨコさんがこつちに引っ越してきました。渋谷さん一言お願いします」

わたし「(マイクで) あの時のこと。母親から学校帰りにカラオケに呼び出されて、わたしの苗字がなくなった、あの日のこと。何回でも音楽にのせて喋ってあげようと思う」

クラスメイトA「渋谷さん。お願いします」

シヨコ「(マイクで) いいよ、何回でも喋ってあげる。あの時のこと。担任の先生が殺されて荒川の河川敷で発見されて、あの子がいなくなった、あの日のこと。何回でも音楽にのせて喋ってあげようと思う。みんな気持ち悪いぐらい人間だからさ。だから好きでしょ

う、そーいうゲスいお話。先生は何で殺されたのか、あの子はどこに行ったのか。もしかして、あの子も殺されたのか、誰だ、あんないい子がこわい♥みたいな。無責任に他人の不幸を噂して、それで盛り上がったら勝手に解散。みーんなが、そういうのを欲しがるならわたしが何度だってそれに答えてあげる。それが御望みなんでしょ？」

クラスメイト（全員）「いええええーいーいーい」

クラスメイトたちが体育の授業のように舞台の周りをぐるぐると走り始める。

わたし「（マイクで）中三になって、主人公の女の子が悪いやつらをバタバタ殺す漫画を描いた。主人公に殺られる敵にはクラスの嫌いな女の子の名前をつけたりして。今にして思えば、世界が終わるはずありませんでした。想像した以上に世界はどこまででも続いていました。その先の、その先まで、途方もなく続いていました」

ショーコ「ハッピーエンドは勝ちとらなきゃならない。誰に乞うものでも遠慮するものでもなく。14年前、ここだけの話。わたし、あの子に「うちのお母さん殺してよ」って頼まれました。でも、さすがにそれは無理で。そしたら、あの子はいなくなってしまうました。みんなわたしに興味ない。知ってます。だからわたしの苗字がなくなっただとしても、先生が死んでも、あの子がいなくなっただとしても大した事ではないのかもしれない」

わたし「（マイクで）14年前、ここだけの話。いいよ、何回でも喋ってあげる。みんな気持ち悪いぐらい人間だからさ。だから好きでしょう、そーいうゲスいお話。結局、わたしは14年後、教師になり被害妄想ばかりが強い生徒たちに囲まれながら、狭い世界で息苦しくうるさい環境で、あの日のことにフタをしようと生活しています。わたしの苗字がなくなったことも、担任のあの先生が殺されたことも。大好きだったあの子の嘘も。全部なかったことにして」

舞台上に制服姿の可愛い女子（以下、シオリ）が現れる。
クラスメイトたちが、さらに速度を上げて走り去っていく。

シオリ「（笑顔で）ショーコちゃん、うちの親殺してよ」
ショーコ「……何、言ってるの」

シオリ「だよね？」

シヨーク「それって違うじゃん。嘘じゃん」

シオリ「それがシヨークちゃんにとって嘘になっちゃうなら、嘘だね」

シヨーク「そうだよ、そんなの、ただの嘘だよ」

クラスメイトたちにあわせて、シヨークもシオリも走り去っていく。

【1】

学校の応接室。

ジャージ姿の体育教師（以下、山辺）とわたし。

そしてうつむき加減の女子生徒（以下、原）が無言のままソファに座る。

3人は神妙な面持ちで話をしている。

原 「だから。無理なんで。出たくないんで。体育」

山 辺 「何で？」

原 「だから言ってるじゃないですか。体操着、着たくないって」

山 辺 「じゃあ体操着は着なくていいから。ね？」

原 「体操着着ないって、どうするんですか？」

山 辺 「何か代わりになるジャージとかさあ、そういうの用意してもらってで」

原 「でもそれ着てるのわたしだけになりますよねえ。おかしくないですか？」

山 辺 「おかしくはないんじゃない？」

原 「おかしいですよ。普通に考えてくださいよ。他のクラスの女子とかに絶対何か言われるじゃないですか」

山 辺 「それは他の先生たちからも説明してもらおうようにするから」

原 「え？みんなにバラすってことですか？」

山 辺 「そうじゃない。そんなこと先生言わないよ」

原 「言いましたよね、説明するって。わたしのこと、先生たちから、他のクラスにも説明するって」

山 辺 「言っていないよ」

原 「言ってるんで。さっきからすごい言ってるんで」

山 辺 「そんな言った言わないで怒らないですよ」

原 「だって」

わたし「原さん、山辺先生たぶんそーいう意味で言ったわけじゃないから」

原 ……」
山 辺「お願いだから先生のこと少しは信じてくれないかなあ」
原 ……」
山 辺「ね？」
原 「先生知ってますよね。わたしがストーカーされてること」
山 辺「わかってるよ。わかってるからこうやって話しているわけじゃない？」
原 「グラウンド出るのだって嫌なんですよ。体操着で。どこからアイツが狙ってるかもわからない」
山 辺「でも、そーいうのを一個一個解決していかないと、原さん学校来れなくなっちゃうから。悔しいじゃない。ストーカー男ごときで」
原 「ごときで」
山 辺「ごときだよ。原さんはまだ若いから驚いちゃってるかもしれないけれど、自分の生活をどんどん制限していつちやって、そんなの相手の思うツボだよ。ストーカーなんて、相手にするのが一番まずいんだから。自分に興味があるからこそこまで反応するんだ、つて余計に刺激しちゃって。そんなの馬鹿みたいじゃない」
原 「だって、いつまた撮影されてるかわかんないじゃないですか」
山 辺「トイレ？」
原 「そうです」
山 辺「それだってさあ、体に悪いよ。いつまでトイレ我慢するの、原さん」
原 「学校では無理なんで」
山 辺「でもしたくなるじゃない」
原 「水分取らなければいいじゃないですか」
山 辺「でもものど乾くじゃない、ご飯食べたら」
原 「じゃあご飯も食べません」
山 辺「お腹空くじゃない。ご飯我慢したら」
原 「ダイエットしてるんで大丈夫なんで」
山 辺「おしっこごときでそんなに意地張らないですよ」
原 「張ってません」
山 辺「一生学校でおしっこしないつもりなの？」
原 「しません。つていうか、学校にも一生いません。卒業します、ちゃん」と
山 辺「言った？わたし、一生なんて言った？」
原 「言いました」
山 辺「言っていないよ」

原 「言いました。え、言いましたよね？今」
山 辺 「そんな言った言わないでさっきからガンガン、やめてよ」
原 「山辺先生ですよ。さっきからガンガンくるのは」
山 辺 「違うよ。そんな、わたしは。原さんの未来を想って話しているだけで」
原 「何で体操着とトイレのことで未来の話になっちゃうんですか？」
山 辺 「心配してるんだよ」
原 「わたしは今、体操着が着たくないって話をしてるんですよ？」
わたし 「だからそれは、先生たち、きちんとわかっているから」
原 「だったら申し訳ないんですけど、もっと気遣ってもらってもいいですか。こっちも別に体育の授業出たくないから言ってるわけじゃないんで」
わたし 「でも、原さん。ずっと体育の授業出ないわけにはいかないでしょ」
原 「わたし被害者ですよ。何でわかってくれないんですか」
わたし 「違うの。わかっているから。わかっているから言っているの」
原 「こっちはわかってないから嫌なんだって言ってるんじゃないですか」
わたし 「わたしはあなたの味方だから」
原 「じゃあ先生は、わたしが殺されそうになったら代わりに殺されてくれますか？」
わたし 「……え」
原 「なーんちゃって」
山 辺 「嘘でもそーいうの言うのどうかなあ？」
原 「自己防衛じゃん」
山 辺 「……」
原 「体育、しばらくは見学でお願いします。それが駄目なら、休学とかそーいうの、親に相談するんで」
わたし 「原さん」
原 「何ですか？」
わたし 「今日もいらっしやる？お母さま、お迎え」
原 「来ますけど」
わたし 「じゃあそのときに改めてお話しさせてもらえないかな、少しだけ」
原 「今日は事務所でレッスンある日なんで早く帰らなくちゃいけないんで、すいません」
山 辺 「レッスン？」
原 「はい」

わたし「じゃあ言っておいて。お話ししたいって渋谷が申しとおりました、
っつ」

原 「はい……」

山 辺 「原さん」

原 「何ですか？」

山 辺 「スカート、短いから下げよ」

原 「(うざったそうに) はい」

原が一礼して応接室を出ていく。

わたしと山辺が緊張を解く。

山 辺 「疲れたね」

わたし 「何かすいません」

山 辺 「それはいいんだけどさ。渋谷先生だって好きであの子の担任受け持
ってるわけじゃないんだし」

わたし 「苦笑いしながら) そうなんですけど」

山 辺 「え、渋谷先生。次は？」

わたし 「わたし5限授業ないんで」

山 辺 「そっかそっか。わたしも」

わたし 「ああ」

山 辺 「ていうか、渋谷先生ってどうやってストレス発散してるの。お酒？」
わたし 「いえ、わたし強くないんで」

山 辺 「じゃあどうしてんの？」

わたし 「たまにカラオケ行ったりして」

山 辺 「え、渋谷先生、カラオケ行くんだ」

わたし 「行きます」

山 辺 「へー。何歌うの？」

わたし 「ブランキーとか」

山 辺 「渋ーい」

わたし 「好きなんです」

山 辺 「じゃあさ、今度一緒にカラオケ行かない？」

わたし 「いいですよ」

山 辺 「で、飲もう？」

わたし 「山辺先生は。ストレス、どうしてるんですか？」

山 辺 「だから飲み？」

わたし 「ああ、すいません」

山 辺「でもわたしすぐやらかしちゃうんだよね。こないだも行きつけのバーのダイヤモンド・ユカイみたいな店長ぶん殴っちゃったばかり」

わたし「それ大丈夫なんですか？」

山 辺「曲がったことって大嫌い。スクールウオーズの山下真司と一緒にだね。職業病、一種の。今の生徒には通用しないけど」

わたし「はい……」

山 辺「ほんと難しいよねー、この仕事。他の人に代わってもらえないことが多すぎるっていうか。色々デリケートじゃない、子供相手だと。理解も同じ教師同士じゃないと得られないし」

わたし「他業種はなかなかそうですよね」

山 辺「全然だもん。うちの彼氏とかフリーターだからさあ、なおさら駄目っていうか。こないだも記念日だったから、美味しいイタリン見つけて連れてってやったのね。そしたらいきなりばばあは草食つとけ、とか言い出してさ。冗談でも傷つくじゃない。ばばあはとかそういうの」

わたし「そうですね」

山 辺「だからわたし、頭きて大泣きしてやって。そしたら、あっちが逆ギレしてきてさあ、もういい、とか言っちゃって、わたし置いて店出てくの。最悪じゃない。で、わたしも興奮してたから走って追いかけて。記念日だよ、ありえないでしょ。すっごい走って、喉からっからになってさあ。そしたら店員も追いかけてくんのよ。何だろうと思ったら、大声で、お金払って下さーいとか叫ばれちゃってー」

わたし「ああ」

山 辺「恥ずかしいでしょー、もうあのイタリアン行けないわ」

わたし「行けないですね……」

山 辺「ごめんね。もしかしてわたしの話つまんない？」

わたし「そんなことないですよ」

山 辺「もー、こんだけ醜態さらしてんに」

わたし「すいません」

山 辺「まあ、いいんだけど」

わたし「いや、あの、ちょっと考えちゃってて」

山 辺「さっきの？」

わたし「はい。殺すとか殺されるとか真顔で言われるとやっぱ結構怖いなーって」

山 辺「気持ちわかるんだけどさあ、悪質でしょ。言うことが。ちょっと引いちゃったもん。(モノマネをしながら) わたしが殺されそうになったら代わりに殺されてくれますか、とか」

わたし「でも気持ち悪いですよね、ストーカー。犯人に心当たりがないって。

トイレにカメラの件もありますし」

山 辺「変態だ、変態。子供がおしっこするとこ見て何が楽しいんだろうね」
わたし「想像すると、何か悲しくなりますね」

山 辺「とりあえず原さんが体育出れてくれたらいいんだけどね」

わたしの形態のバイブ音が鳴る。

わたし「(携帯を確認する) ちょっとすいません」

山 辺「いいいいいいよ」

わたし「電話に出て」
「ごめん、いま山辺先生という。うん。あとで電話かけ直す。はい、はい」

わたしが携帯電話を切る。

山 辺「室(ムロ)先生？」

わたし「すいません」

山 辺「いいのに、気遣わなくて」

わたし「ただでさえ職場恋愛なんので」

山 辺「この仕事出会いもないもん。仕方くない？」

わたし「でもあんまよく思わないじゃないですか。生徒は」

山 辺「真面目すぎ、渋谷先生」

わたし「よく言われます」

山 辺「あの子たちの噂話に付き合ってたら身体持たないよ？」

わたし「そうなんですけど」

山 辺「うちらもいい歳なんだから。ちょっとモラルに反したところで文句言われないって」

わたし「はい……」

山 辺「いつだっけ？異動」

わたし「来年です。うちのクラスが卒業してからのので」

山 辺「わたし渋谷先生がいなくなっちゃったら寂しいわー」

わたし「そうですか？」

山 辺「そうよ。気兼ねなく話す相手いなくなっちゃって。別にいいじゃん

ねえ、夫婦同じ職場でも」

わたし「わたしも寂しいです。ここ、離れるの」

山 辺「ごめん。いい話してるところ何なんだけど、我慢してたからおしっ

こがしたい」

わたし「行ってきてください」

山 辺「ごめんね」

わたし「はい」

山 辺「あ、カメラ大丈夫だね？」

わたし「たぶん」

山辺が応接室を出ていくと、カラオケルームに照明がつく。

そこから過去が交差していき、シヨココがソファアに座わる。

そしてシヨココが電モクで曲を入れる。

わたし「もしもあの時、いいよ、って言ったら、あの子を救ってあげることができたんだろうか。水野先生は死なずに済んだのかしら。このとき、わたしはまた考えていました。わたしが殺されそうになったら代わりに殺されてくれますか。ああ、あのときと同じだなーって。そしたら思い出しちゃって。ねえ、シヨココちゃん。うちのお母さん、殺してよ。いいよ。あのとときそれが言えたなら、わたしはあの子の神様になれたのかしら」

シヨココ「いくぞおおおらあ！」

ブランキージェットシタイの「赤いタンバリン」が大音量で鳴る。カラオケルームにシオリがタンバリンを持って入ってくる。ふたりが音楽に合わせて自分流の振付で踊りはじめる。

シヨココ「(マイクで)わたしも好きだよおおお！」

カラオケのモニターと下手の壁に文字が映し出される。

「荒川、神キラーチューン」

暗転

【2】

カラオケルーム。

シヨークと大きな体の女子生徒（以下、百瀬）が無言のままソファに座っている。

ふたりの目の前には、漫画の原稿がある。

シヨーク「何で？」

百瀬「すごいウルトラスーパーミラクル、渋谷さん。ヤバイ」

シヨーク「それ褒めてくれてる？」

百瀬「褒めてるよー。ある意味、才能ヤバイ。超下級でつまんない」

シヨーク「ウルトラスーパーミラクルって言ってくれたじゃんー」

百瀬「だからある意味ね。なかなかこんなイケてないセリフ描けないよ」

シヨーク「何だよー」

百瀬「渋谷、絵描くの上手いけどオチ弱いからなー」

シヨーク「そうかな……？」

百瀬「そうだよ。わたしだったら、ここで森田ユカ殺すね」

シヨーク「それは自分が森田さん嫌いだからでしょ」

百瀬「だってあいつむかつくじゃん。芸能人ぶっちゃって。テレビも出ないのに雑誌ちよっと載っただけでうるさいし。あいつ爆死だかね、まじで」

シヨーク「わかったよ」

百瀬「出すの、それ」

シヨーク「出すよ」

百瀬「どこ？」

シヨークが週刊漫画を取り出して、百瀬に渡す。

シヨーク「(ページをめくって渡す) ここ。大賞100万」

百瀬「まー。獲ったらおごって。ないと思うけど」

シヨーク「うるさいなあ」

百瀬「獲ったらどうするの？」

シヨーク「お金？」

百瀬「そうじゃなくて、将来的に」

シヨーク「デビューするよ」

百瀬「漫画家で？」

シヨーク「うん」

百瀬「高校は？」

シヨーク「行くよ」
百瀬「大学は？」

シヨーク「とりあえず行くつもりではいるけど。受かったら考えるかな、ど
つちも」

百瀬「はーん」
シヨーク「え、無理？」

百瀬「いや、そういうんじゃないけど」

百瀬が煙草を取り出して、慣れない手つきで火をつける。

シヨーク「ももちゃんは？描かないの、漫画」

百瀬「何か、どうすつかなー、とは思ってる」

シヨーク「何で？」

百瀬「うーん。投稿しても全然駄目だしさあ」

百瀬が煙草の煙を吸い込んで咽る。

シヨーク「(咽てることに)大丈夫？」

百瀬「全然」

シヨーク「……で？」

百瀬「考え中。もろもろ」

シヨーク「もちやん、わたしよりも絵上手いし面白いし。描いた方がいい
つて」

百瀬「まあねー」

シヨーク「一緒に漫画描こうよ。わたしももちゃんの漫画好きだし。ももち
やんが描かなくなつちやったら、わたしの漫画の師匠いないこと
になつちやうよ」

百瀬「あちーよ」

シヨーク「だつてさー」

百瀬「あー。中退してアシでもやろうかなー」

シヨーク「最悪、高校は行つといた方がいいって」

百瀬「堅実うー」

シヨーク「だつて誰のアシスタント付くの？」

百瀬「セーラームーン」

シヨーク「竹内先生は辞めといた方がいいって。だつてハンターハンターの
べた塗りも手伝わないとイケないかもしれないじゃん。富樫先生

の奥さんなんだよー」

百瀬「いいじゃん。そしたら集英社に挑戦状送りつけるような漫画描こうよ。どがーんって爆死」

シヨコ「真面目に考えなっつて」

百瀬「(少しむっとして) あんたが真面目過ぎんだよ」

カラオケルームの扉がノックされ、

カラオケのエプロンをした金髪の店員(以下、片桐)が部屋に入っつてくる。

百瀬が煙草の火を消して、煙草とライターと灰皿を隠す。

片桐「お待たせしましたー」

電モクで曲を入れると TOKIO「19時のニュース」(カラオケ)が流れる。

片桐がメロンソーダの注がれたグラスを、シヨコの前に置く。

そして百瀬の前には、コーラの注がれたグラスを置く。

片桐「(百瀬を見る) ……(ゆっくりどうぞー)」

片桐が部屋を出て行く。

百瀬が隠していた煙草とライターと灰皿を机の上に出す。

百瀬「あの店員、感じ悪いよね」

シヨコ「そうかな？」

百瀬「あんま好きじゃない。爆死」

ふたりは顔を見合わせてイントロに合わせてはしやぎ始める。

百瀬がカラオケに合わせて歌い始めると、シヨコが曲に合わせて自分流の振付で踊る。

途中で百瀬がカラオケを歌うのをやめる。

百瀬「ごめん。おしっこ」

シヨコ「ここでー？」

百瀬「すんごい尿意。すんごい」

シヨコ「ええええー」

百瀬がトイレに立つと、シヨークがカラオケを途中から歌い始める。
シヨークがサビを歌い切ると、急に部屋のドアが開く。
部屋に可愛らしい女子が4人（以下、森田、遠藤、小林、シオリ）が
入ってくる。

彼女らは学校の指定ではないニットや靴下を身に付けている。

遠藤「いたー」

森田「これ何の曲？」

シヨーク「えええ？」

遠藤「トイレで百瀬さんと会ってー」

シヨーク「そうなんだ」

森田「え、大丈夫うー？」

シヨーク「いいよ。大丈夫」

シヨークが電モクでカラオケを消すと、音楽が止まる。

そしてタバコとライターと灰皿を女子たちにバレないように隠す。

遠藤「つていうか、ふたりでカラオケ来たりするんだー」

シヨーク「ここ安いし、持ち込みしてもあんまバレないし」

森田「うちら、まじで渋谷さんが転校してきてくれて良かったと思ってる
から」

シヨーク「え？」

森田「渋谷さんって、百瀬と仲良しじゃん。（小林に）ねえ？」

小林「（ぎこちなく）うん」

遠藤「クラスで人と喋ってるって見たことなかったもんねー」

森田「だってあの超暗いじゃん」

遠藤「それ言っちゃうー？」

シヨーク「あの……ももちゃんは？」

遠藤「何かー、お腹痛いとか言って個室こもっちゃってる」

森田「もう出てこないじゃん？」

森田と遠藤が手を叩いて笑う。

シヨーク「森田さんは？」

森田「何が？」

シヨーク「ここよく来るの？」

森田「たまにー」

シヨーク「そうなの？」

森田「ユカ、地元あんまわかんないんだよね。基本、原宿でしか遊ばないし」

シヨーク「原宿？」

遠藤「芸能人がぶれなの。この人」

森田「(嬉しそうに) ちょっとおー」

遠藤「こないだも竹下通りでスカウトされたんだってー」

シヨーク「すごいねー」

森田「渋谷さん、今月号のジッパー見た？」

シヨーク「え、ごめん、何で？」

森田「たまに載るんだけど、ユカ。カットモデルで」

シヨーク「へー」

森田「まあ、そういう系じゃないもんねー。渋谷さんは」

遠藤「そういうのやめなよー」

森田「だって事実じゃん」

シヨーク「ごめん……」

遠藤「あ、ねえ、こないだ3組の子に聞いたんだけど、ここでベロチュウしてる子がいたんだってー」

シヨーク「ええええええ」

小林「嘘でしょ！」

森田「知ってるー。それ結局トイレでもやっちゃってたんでしょー？」

シヨーク「そうなのー？」

森田「らしいよ。それで女子トイレの便座壊したらしいもん、その子」

シヨーク「えええええ、どうやって壊すのー？」

森田「それ聞いちゃうー？」

遠藤「ここ、結構エッチ目的で使ってる子多いよねー」

森田「でも公園の身障者用のトイレよりはマシじゃん？」

遠藤「それ最悪ー」

シオリ「しかもその子さあ、ここの店員さんともやってたんだよねー？」

遠藤「まじ！」

シオリ「まじまじ。トイレ行けなかったもん。わたし見ちゃって」

遠藤「ヤリマーン」

森田「見たんだ？」

シオリ「見たよ、すごかったんだよ」

森田「だって。小林さん」

小林「え？」

森田「小林さんもヤっちゃえば。小野先輩と」

小林「ちよちよと待ってよ！」

森田「いいじゃん。告っちゃえて」

小林「無理無理無理、まだ全然、そーいう感じじゃないから」

森田「そんなん言ってるのと取られるよ、誰かさんに。嫌じゃない？」

小林「それは、嫌だけど」

森田「ほらー」

遠藤「でも小野先輩って童貞っぽくない？」

森田「どうする。逆に手当たり次第な感じだったら？」

遠藤「うわ、それきつーいー」

森田「(渋谷に) ねー？」

渋谷「(無理やり合わせて) ああ…」

森田「渋谷さん一緒歌おうよ」

シヨコ「え？」

森田「うちの部屋すごい煙草臭くって。まじありえなくてー」

シヨコ「そうなんだ」

森田「(フードのメニューを見ながら) ねえ、明太マヨポテト頼んでいい？」

小林「え、あ。うん」

小林が壁に取りつけの電話をかける。

シヨコ「え？」

森田「大丈夫払うから」

シヨコ「うん……」

遠藤「自由すぎるでしょ」

森田「いいじゃん、一人より大勢のが」

小林「あの、すみません。注文いいですか？明太マヨポテト一つお願いしたいんですけど。はい、お願いします」

小林が電話を切る。

森田「渋谷さん、さっき何歌ってたの？」

シヨコ「……言っても知らないと思う」

森田「なにになに。余計気になるんだけど」

シヨーク「こどものおもちや」

森田「え、何それ。(遠藤に)わかる?」

遠藤「えっとね……」

シオリ「リボンだよ。ね?」

シヨーク「えええ。読んでた?」

シオリ「渋谷さんリボン派?」

シヨーク「わたしリボン派」

シオリ「わたしなかよし派」

シヨーク「(悔しそうに)なかよしか」

シオリ「でもママレードボーイは読んでた」

シヨーク「まじ!?!」

小林「わたしも。ママレードボーイ読んでた」

シヨーク「うわ、あれヤバイよね?」

小林「銀太かつこ良くない?」

シヨーク「わかる!わたしも銀太!」

シオリ「えー。アメリカ留学した方がいいじゃん」

小林「いや、遊は完璧すぎて逆に。ねー?」

シヨーク「ああ、駄目でしょ」

シオリ「何でえ?」

小林「だってアイツ、テニス部なんだよ?」

シオリ「そこがいいんじゃない」

小林「いやいや。テニス部入ってるような男子。絶対かつこつけすぎでし

よ」

シオリ「それ偏見だから」

シヨーク「でもママレードボーイって全員テニス部設定だよね?」

小林「えええ、そうだけ?」

シヨーク「そうだよ。だからみんな七頭身なんじゃん」

シオリ「えー」

森田「……そーいう系わたし全然わかんないんだけど」

小林「あ。ごめん」

森田「つかさあ、SPEEDとか安室ちゃんとか歌わないの?」

シヨーク「わたし、あんまそーいうの聴かなくて」

森田「こっちはアニソンとか聴かないんだけど」

シヨーク「ああ、ごめん」

森田「え、じゃあさ。アニメのCDしか持ってないとか?」

シヨーク「え?」

森田「うっわ、まじで？」
シヨーク「うん」

森田「えええ。じゃあ、わかんない？（歌う）キャンユーセレブレイ？キ
ヤンユーキスミートウナーイ？」

シヨーク「テレビで見たりはするよ、安室奈美恵」

森田「だからそうじゃないじゃん？」

シヨーク「うん、ごめん」

森田「（立ち上がりながら）ないわー」

遠藤「え、行く？」

森田「ここも何か、煙草臭いし」

遠藤「わかんないけど」

森田「鼻つまってんじゃん？」

森田が部屋を出ていく。

遠藤「もー。行く」

小林「うん……」

遠藤と小林がしゅしゅと部屋を出ていく。

シヨーク「……」

シオリ「ごめんね、何か」

シヨーク「いや、うん」

シオリ「渋谷さん吸うの？煙草」

シヨーク「吸わないよ」

シオリ「ふーん」

シヨーク「うん……」

シオリ「じゃあ、持ってない？」

シヨーク「え？」

シオリ「火」

シオリが煙草を取り出す。

シヨークが隠していた煙草とライターと灰皿を取り出す。

シオリ「吸うんじゃん」

シヨーク「わたしじゃなくて、ももちゃんが」

シオリが百瀬のライターで火をつけ、慣れた手つきでタバコを吸う。

シオリ「これ内緒ね。怒られちゃうから」

シヨーク「うん」

シオリ「あの人たちもさあ、はっきり言えばいいのにね」

シヨーク「ああ……」

シヨークにとって気まずい間。

シオリ「シヨークちゃん」

シヨーク「はい？」

シオリ「渋谷さんの下の名前って、シヨークちゃんだよね？」

シヨーク「そう」

シオリ「じゃあ、シヨークちゃんって呼んでもいい？」

シヨーク「別に。いいけど」

シオリ「(麻原のリズムで)シヨークーシヨーク、シヨコシヨコシヨークー」

シヨーク「あ。ごめん、やっぱ嫌かも」

シオリ「(すっごい笑って)嘘うそ、ごめんね」

シヨーク「別にいいけど……」

シオリ「え、いいの？」

シヨーク「えええ」

シオリ「どっち？」

シヨーク「やっぱ嫌だ」

シオリ「わかったよーん」

シヨーク「うん」

シオリ「シヨークちゃん。今度ブランキージェットシテイーのCD貸してあげる」

シヨーク「ブランキージェ？」

シオリ「バンド。知らない？」

シヨーク「ごめん」

シオリ「いいの、わたしもこないだ先輩の後輩に教えてもらったから」

シヨーク「それ、先輩なの？後輩なの？」

シオリ「どっちでも大丈夫。その人、優しいから」

シヨーク「うん」

シオリ「かっこ良いんだよー。めっちゃ」

小林「何すんのよ！」

百瀬と小林が取っ組み合いになると、シヨークコがふたりのやりとり
に気付く。

その後ろから、部屋に片桐が入ってくる。

片桐「お待たせしましたー」

小林「え？」

入り口付近でやりあってた百瀬と小林が固まる。
すると片桐が煙草に気付く。

百瀬「(煙草に気付いて) あ……」

片桐「ごゆっくりどうぞー」

明太マヨポテトを置いて片桐が部屋を出て行くと、小林が百瀬をぶ
殴って部屋を出ていく。

シヨークコが百瀬に近寄ると、それを振り払って百瀬は部屋を出て行く。

シオリ「(マイクで) シヨークちゃん」

シヨーク「何——？」

シオリ「(マイクで) わたし、シヨークちゃんのこと好きよ」

シヨーク「(マイクで) わたしも好きだよおおお！」

【3】

カラオケルーム。

シヨークとシオリは歌い過ぎてクタクタになり、ソファアに座わり込
む。

シヨーク「疲れたー」

シオリ「シヨークちゃん、その曲ばかり歌いすぎ」

シヨーク「だってベンジーかつこいいじゃん。(カバンからCDを取り出し
て) あ、はい。これありがとう」

シオリ「(CDを受け取る) うん」

シヨーク「こないだ借りた、ウルフルズと奥田民生も良かった。あとエレフ

アント、カシマシ！」

シオリ「ほんと？」

シオーコ「あ、でもマリスミゼルだけよくわかんなかった。ビジュアル系って凄いな、あのメイク」

シオリ「流行ってんだって」

シオーコ「流行ってんの？」

シオリ「貸してくれた人が言ってた」

シオーコ「先輩の後輩？」

シオリ「そっちはね、先輩」

シオーコ「やっぱりややこしいー」

シオリ「シオーコちゃん、宇宙に興味ある？」

シオーコ「宇宙？」

シオリ「何でも知ってるんだよ。だから話合おうと思う」

シオーコ「わたしそんなに宇宙については詳しくないよ」

シオリ「プラネタリウムは好き？」

シオーコ「それは好き」

シオリ「紹介するよ」

シオーコ「その人？」

シオリ「いい人だから」

シオーコ「うん」

シオリ「ねえ知ってる？」

シオーコ「何が？」

シオリ「(内緒話を喋るように) 水野先生。カラオケで絶対に鈴木亜美歌うんだって」

シオーコ「そうなんだ」

シオリ「合コンとか行くじゃん。勝負曲らしい」

シオーコ「水野先生、合コンとか行くんだ」

シオリ「だから合コンで知り合った人だって。今の彼氏」

シオーコ「まじかー」

シオリ「しかも酔っぱらうとキス魔になるんだって」

シオーコ「水野先生って、おっぱい大きいよね」

シオリ「うん、大きい」

シオーコ「あれ、超羨ましくない？」

シオリ「だから水野先生ってちよつとスケベなんだってー」

シオーコ「そうなの？」

シオリ「うん、言ってたよ」

シオーコ「誰が？」

シオリ「ん？」

シヨークコのメール着信音が鳴る。

シヨークコ「(メールを確認しながら)……」

シオリ「誰？」

シヨークコ「ももちゃん」

シオリ「漫画？」

シヨークコ「まあ、そう」

シヨークコが携帯電話をカバンにしまう。

シオリ「いいの？」

シヨークコ「後で返す」

シオリ「あ。こないだのやつ、すっごい面白かった」

シヨークコ「え、まじで？」

シオリ「うん、あんなの描けるなんて尊敬する」

シヨークコ「つまんなくなかった？」

シオリ「ううん。凄いや、シヨークコちゃん」

シヨークコ「でもアレ、ちょっとオチ弱いじゃん？」

シオリ「そんなことないよ。アレなら100万絶対取れると思う」

シヨークコ「いや、もっと攻めていかないと印象に残らないと思うんだよね。」

審査員の

シオリ「わたしは絶対デビュー出来ると思う」

シヨークコ「いやいやいやいや」

シオリ「今度、漫画家さんに知り合いがいるから言っておくよ」

シヨークコ「え？まじ、誰？」

シオリ「忘れちゃった」

シヨークコ「えーっ」

シオリ「シヨークコちゃんが漫画家になったら、紹介してあげる」

シヨークコ「まじか」

シオリ「わたしシヨークコちゃんの描く漫画好きだから。すっごく」

シヨークコ「ありがとう」

シオリ「もしもさ。100万円獲ったら、どっか連れてってよ」

シヨークコ「いいよ、どこ行きたい？」

シオリ「わかんない」

シヨーク「何それー」

シオリ「あんまそーいうこと考えたことないんだー。わたし」

シヨーク「そうなの？」

シオリ「苦手なの、考えること。だからやりたいこととか将来の夢とかもない。あんま」

シヨーク「ふーん」

シオリ「考えるより信じるなの」

シヨーク「何を？」

シオリ「母親」

シヨーク「お母さん厳しいの？」

シオリ「すごいんだー。殴ってくるの、ゲーで」

シヨーク「えええ」

シオリ「(気にするそぶりを見せぬように)うちの家、母子家庭だからストレス溜まってんのかもねー。何かあるとゲー。こないだもお母さんと喧嘩しちゃって。そしたらお母さんの知り合いの男の人が来て、ふたりに殴られちゃってさあ。わたし途中で気を失っちゃって死ぬかと思った」

シヨーク「大丈夫？」

シオリ「今のところは」

シヨーク「うちも母子家庭だから。何かあったら、言ってね」

シオリ「ありがとう」

シヨーク「うん」

シオリ「ねえ、シヨークちゃん」

シヨーク「何？」

シオリ「神様ってほんとにいるのかな？」

シヨーク「いないよ、たぶん」

シオリ「そっか」

シヨーク「うん……」

シオリ「ねえ」

シヨーク「ん？」

シオリ「シヨークちゃんが漫画家になったらわたしのことも漫画にしてよ」

シヨーク「いいよ」

シオリ「嬉しい。そしたらそれ売りまくろうね」

シヨーク「でも、森田さんには内緒ね。バレたら殺されるから」

シオリ「わかった」

カラオケルームの扉がノックされ、カラオケのエプロンをしただらしない男（以下、時田）と、違う学校の制服の女（以下、マリナ）が入ってくる。

時 田「うーいー」

シオリ「来たー！ー」

マリナ「まじウケんだけど、この人」

時 田「違うんだって。便所の掃除忘れてて上がれなかったんだって」

シオリ「何それー」

時 田「だから、便所の、掃除」

マリナ「時田さん、ほとんど仕事してないじゃーん」

時 田「ふざけんなって。俺にとっての本業はバイトじゃねえから」

マリナ「ちようウケるー」

シオリ「つてか彼女？」

時 田「さっきそこで会った」

マリナ「ナンパです」

時 田「（マリナにかっこいいポーズで）ちげーし。これ、運命の出会い」

マリナ「ちようかつこいいいー」

シオリ「あれ、片桐くんは？」

時 田「あいつ、まだなんじゃん？」

シオリ「もー！ー」

シヨーク「え……？」

シオリ「あ、シヨークちゃん。先輩。マリスミゼル貸してくれた人」

シヨーク「ああ」

時 田「お友だち？」

渋谷「はい」

シオリが壁に取りつけの電話をかける。

※以下、シオリのセリフ、時田とシヨークのセリフが同時進行している。

シオリ「あ、すみません、片桐くんいますか。はい、お願いします。……ち

よつとー、何してんの。早くおいでよ。まじ遅いよー。こつち。

うん、はい、急いでね。はーい」

時 田「あれ聴いた？」

シヨーク「はい」

時 田「ヤバイよねー。音が重厚っーかメルティーラブで」
シヨーク「はい」

時 田「しかも俺、マリスってさあ、リズムが胎動に似てると思うんだよね？」

シヨーク「胎動？」

時 田「わかんない？(ドラムを叩くような素振りしながら)ドンドンド
ンドン、っつて」

シヨーク「ああ、……かっこいいですね」

時 田「だよ。俺のマイバイブス。まじリスペクト」

シヨーク「(戸惑いながら)お、おお」

時 田「岡村靖幸は知ってる？」

シヨーク「岡村？」

時 田「岡村ちゃん岡村ちゃん岡村ちゃん！」

シヨーク「岡村ちゃん岡村ちゃん岡村ちゃん？」

時 田「やっぱ彼もね、芸術家だから。胎動？感じてると思うんだよね」

シヨーク「(圧倒されて) ああ、はいー」

シオリが電話を切って、慣れた手つきでタバコを吸う。

シオリ「変に絡むのやめてもらっていいですかー？」

時 田「いやいや仲良くなりたいたいだから」

シオリ「だってー。シヨークちゃん、大丈夫？」

シヨーク「はい……」

時 田「(シオリの煙草を見て) おい、未成年」

シオリ「いいから、そーいうの」

時 田「(煙草を取って) じゃあ一本ちよーだい」

シオリ「もー。いい加減にしてー」

時 田「いいじゃん。な？」

時田が煙草に火をつける。

シオリ「シヨークちゃんも吸う？」

シヨーク「いや、いい」

時 田「お友だち、真面目じゃん」

シオリ「いいの。シヨークちゃんは、それで。ねー？」

シヨーク「うん……」

シオリ「次、何入れる？」

シヨーク「(気持ちをとりにくろいながら) うん、どうしよう」

時 田「鈴木亜美歌えって」

シオリ「それ、片桐くんの彼女に頼みなよー」

時 田「言っとくけど、まじ、あいつの彼女淫売だかんね」

シオリ「知らないしー」

時 田「まじでまじで。こないだも凄かったらしいから」

シオリ「何が？」

時 田「酔っぱらって上乘ってきた、とか言って」

シオリ「聞きたくない、もう」

部屋に私服姿の片桐が入ってくる。

片 桐「すいません。遅くなっちゃって」

時 田「おいー」

シオリ「遅いよー」

時田が片桐にグーパンチをする。

片 桐「痛ってええ」

時 田「はい、来ました、未来有望な若者——」

片 桐「何すかー」

時 田「いやいやいや、俺はお前みたいな若者に未来をかけてみたいと思ってるわけ」

片 桐「今まで何話してたんすか？」

時 田「え。お前がやりまくってるってこと？」

片 桐「ちよっとー」

時 田「そんなときは俺マネージャーとかやつから。お見知りおきよろしくー」

片 桐「勘弁してくださいよおー」

シオリ「シヨークちゃん。片桐くん」

シヨーク「あ、えーっと……どうも」

片 桐「今まで何歌ってたの？」

シオリ「ブランキー」

片 桐「またー？」

シオリ「だっけかっこいいじゃん、ベンジー。ねー？シヨークちゃん」

シヨーク「うん……」

片桐「俺、あれ聴きたい。大迷惑。奥田民生！」

シオリ「あ、それもいい！」

シヨーク「あれ、奥田民生じゃなくてユニコーンですよね？」

片桐「そうだった？」

シヨーク「そうですよ」

片桐「良くない？どっちでも」

シヨーク「良くないです。わたし、シオリちゃんから借りてるんで。ちゃん

と聞いているんで」

シオリ「借しちゃった」

片桐「ああ、アレ？」

シヨーク「……」

時田「いいから鈴木亜美歌えって」

マリナ「歌ったら何してくれんの？」

時田「何されたいの？」

マリナ「やめてよー、ちっちゃい子が見てるからー」

時田「じゃあトイレ行っちゃう？」

マリナ「(満更でもなさそうに) 変態——」

シヨーク「……」

シヨークが電モクでユニコーン「大迷惑」(カラオケ)を入れる。

すると険しい顔をして、シヨークはカラオケに合わせて歌い始める。

※以降のセリフは、カラオケで聞き取りづらくなる。

※以下、時田とマリナのセリフ、片桐とシオリのセリフが同時進行していく。

時田「大丈夫大丈夫」

マリナ「大丈夫じゃないからー」

時田「減るもんじゃないし、良くない？」

マリナ「減るよ、減る減る」

時田「じゃあ、キスだけ」

マリナ「何でそうなのー」

時田「いいじゃん、しよ」

マリナ「無理ー」

時田「はあ？」

マリナ「はーい、一瞬。おトイレ」

片桐「知ってる？民生って、すげー神経質っていうかこだわりが凄くて、誰かに止められるまで自分の曲完成させないでずーっと直してるらしい」

シオリ「そうなの？」

片桐「ヤバくない？俺、めっちゃ憧れるわー」

シオリ「あ、ねえ。こないだの人は。あの、音楽の」

片桐「誰？」

シオリ「覚えててよー」

片桐「いやいやいやいや。お前が覚えとけよー」

マリナが出ていくと、時田も追いかけるように立ち上がる。

時田「(マイクで喋る)俺、着替えてくるわ」

片桐「あ、はい」

時田が部屋を出ていく。

シオリ「ほんとひどいね。あの人。手当たり次第で」

片桐「俺らもする？」

シオリ「嫌だ」

片桐「何だよ」

シオリ「シヨコちゃん、いるじゃん」

片桐「歌ってるから」

シオリ「でもいるじゃん」

片桐「はあ？」

シオリ「何？」

片桐「別に、適当で良くね？」

シオリ「こないだもしてあげたじゃん」

片桐「だって全然かまってくれないじゃん？」

シオリ「意味わかんないしー」

片桐「わかるでしょ？」

片桐がシオリにちよっかいをかけ始める。

シオリ「ねえー」

それらのやりとりを見ていたシヨークは突然カラオケをやめる。

シヨーク「ごめん、帰る……」

シオリ「シヨークちゃん？」

シヨークがカバンを持って部屋を出ていく。

カラオケ音源が流れる中で、シオリと片桐が会話を続ける。

シオリ「(マイクで) ちょっとー」

片桐「(マイクで) いいじゃん。どんまいって感じで」

シオリ「(マイクで) 彼女いるじゃん」

片桐「(マイクで) 大丈夫。俺、あいつのこと愛してるから」

シオリ「(マイクで) じゃあ大事にしてあげればいいのに」

片桐「(マイクで) 凄いのよ、俺の中の愛が。好きすぎて逆に殺しちゃうかも」

シオリ「(マイクで) のろけー？」

片桐「(マイクで) 大事にしているものがあると、その分寂しくなんない？」

シオリ「(マイクで) 都合いいね」

片桐「(マイクで) お前もな」

シオリ「(マイクで) わたしジュリエットなんですけど」

片桐「(マイクで) 何それ」

シオリ「(マイクで) 悲劇のヒロイン」

片桐「(マイクで) じゃあ俺、ロミオだ」

シオリ「(マイクで) はあー？」

シオリが部屋を出ていく。

片桐がそれを追って部屋を出ていく。

シヨークは漫画を持って、舞台の周りをぐるぐると走り始める。

そのぐるぐるが、やがて風景を変えて学校の廊下に変化すると、途中から森田と遠藤に捕まり、教室の椅子に座らせられる。

【4】

学校の教室。

森田がイライラとしながら、漫画の原稿を読んでいる。

森田「何これ」

シヨーク「……」

森田「おかしいと思ったんだよね。ふたりしてコンコンさあ。あのおー、カラオケは歌を歌う場所なんですけどー？」

シヨーク「……」

森田「(漫画の原稿を見ながら)誰これ。森田って。ユカ？」

シヨーク「……違うけど」

森田「え、じゃあ、森田って。これ誰？」

シヨーク「それ漫画だから」

森田「(渋谷の言葉を遮って)渋谷さんさあ、ユカ何かした？」

シヨーク「してない」

森田「これって嫌がらせじゃん。ないでしょ。まじで」

シヨーク「描き直します」

遠藤「いやいや、そういう問題じゃないでしょ？」

森田「暗いよ。嫌なことあるなら直接言えって」

シヨーク「ごめん」

森田「やっぱ嘘じゃん。今ので」

シヨーク「……」

森田「何でさあ、ユカ、この主人公の子に殺されてるわけ？」

小林が教室に入ってくる。

シヨーク「……」

森田「どっちが殺すって描いたの？」

シヨーク「……半分は、わたし。その、もう半分の、半分は…わたし」

遠藤「4分の3だ」

森田「ちよつと黙っててくんない？」

遠藤「ごめん」

森田「まじで。勘違いしてんって。こんなの描いてんなよ、ゴミブス」

シヨーク「……」

森田「あんた何様？」

遠藤「ゴミブスはないでしょ？」

森田「だってむかつくじゃん」

遠藤「まあ、そうなんだけど」

森田「どうでもいいけど。次描いたら、逆にこつちが殺すよ？」

シヨーク「……はい」

森田「百瀬は？」

小林「トイレ」

森田「はあ。あいつ、どんだけなの」

シヨーク「……」

森田「渋谷さん。あの人、性格あんま良くないから付き合うのやめた方がいいと思うよ」

シヨーク「でも、普通に一緒にいたら楽しいし……」

森田「自分だけ放置されてんのに？」

シヨーク「……」

森田「つてか、うざくないの。よく一緒にいれるよね。転校してきたからわかんないかもしれないけど、あの人、前のクラスでもずっとハブられてたらしいよ。(小林に) ね？」

小林「(うつむき加減になる) ……うん」

森田「あとさあ。渋谷さん、シオリとも最近仲いいじゃん？」

遠藤「(意味ありげに) あー。シオリんね」

森田「でしょ？」

シヨーク「森田さんも仲いいじゃん」

森田「ウケる、そう見えるんだ」

シヨーク「見えるよ」

森田「気を付けた方がいいよ。あの子、ヤバいから」

シヨーク「何が？」

森田「あの子が言ってることつて、だいたい嘘だよ」

遠藤「確かに。さすがにねー」

シヨーク「え？」

森田「こないだも、ユカがホリプロのマナージャーさんとご飯食べたつて言ったら、知ってる人かともか言い出して」

遠藤「あーあるある」

森田「いつもそうじゃん。張り合ってきてさあ。お前、芸能界にどんだけ知り合っているんだよ、みたいな」

遠藤「だってジャーニーズとも仲いいとか言ってたよねー」

森田「それなー」

遠藤「あと、あの子、親のこともすぐ嘘つかない？」

森田「うんうん。虐待されてる、みたいなこと言うよね」

遠藤「悲劇ぶってるつーかさ。あれ、全部嘘だよね？」

森田「つていうか、あの子の家つて変な宗教やってんでしょ？」

遠藤「まじで？」

森田「水売ってんだつて。宇宙の水」

遠藤「宇宙に水なくね？」

森田「コンビニのよりめっちゃ高いらしいよ」

遠藤「ヤバくない？」

森田「あ、あ、あ、あ！」

遠藤「何何何なに？」

森田「そういえば、遂にこないだ、わたしは神さまと喋れるんだよね。とか言い出したの」

遠藤「怖い怖い怖い、何それ」

森田「ね。まじ何それでしょ。ユカに、芸能人ってなれる人となれない人は決まってるから今のまんまじゃ無理だよ、とか言ってきた。何でって聞いたら、神様がそう言ってるから、とか言うの。怖くない？」

遠藤「買いなよ、水」

森田「ね、小林さん？」

小林「え？」

森田「怖いよねー、あの子」

小林「びっくりしたー。急に話振ってくるから」

遠藤「いやいや、聞いとけて」

森田「小野先輩も大丈夫？」

小林「ん？何が？」

森田「小林さん、最近シオリと小野先輩連絡とってるの知ってる？」

小林「嘘ー。何であのふたり、仲良かったっけ？ええ？」

森田「あんただけだよ。知らないの」

小林「待って待って。話についていけないんだけど」

遠藤「確かに。シオリん、小野先輩の話になると黙るよねー」

小林「どういうこと？」

森田「たぶん、あれやってるよ」

小林「……何で？」

森田「だから言ったのに。誰かさんにとられる前にやっちゃえって」
小林「……」

小林が教室を飛び出していく。

遠藤「ちよつとー」

小林を追いかけて、遠藤が教室を出ていく。

森田「小林さん可哀想―」

シヨーク「……」

森田「あの子といて、楽しい？」

シヨーク「……」

森田「ねえ」

シヨーク「……何？」

森田「渋谷さん、あの子に利用されてんじゃん？」

音楽が大音量で鳴ると、森田が教室を出ていく。

入れ違いでわたしがカラオケルームに入ってくる。

わたしはシヨークを見つめるが、シヨークは教室を出ていく。

【5】

カラオケルーム。

しばらくして山辺が、洗った手の水気を切るような仕草をしながら部屋に入ってくる。

山辺「ここのトイレって水の流れ悪いのね」

わたし「タンクが汲み上げ式なんですよ」

山辺「流しても流しても駄目なの。わたし途中でトイレ出れなくなっちゃったもん」

わたし「ああ、そういうの」

山辺「さて飲みますか。ビールでいい？」

わたし「すみません」

山辺が壁に取りつけの電話をかける。

山辺「(メニュー見ながら) あ。注文いいですか？ビールふたつとチーズフライとから揚げ。パリパリ餃子。あと……高菜チャーハン。はい。あ、でもやっぱ、それナシで明太マヨポテト。はい。あと、ワインもらっておいてもいいですか。はい、ボトルの。赤で……大丈夫よ、どうぞ飲むんだから。はい、お願いします」

山辺が電話を切る。

わたし「ありがとうございます」

山 辺「今日わたしご馳走するから」
わたし「え？」

山 辺「結婚祝い」
わたし「いいですよ」

山 辺「何で嫌がるのよ」
わたし「そうじゃなくて。悪いから」

山 辺「大丈夫。わたし金持ってるのよ」
わたし「えー」

山 辺「こないだマンション買ってやったわよ。自分の名義で。ばつんと」
わたし「(笑いながら)じゃあ。ご馳走なろうかな」

山 辺「そうよ、女は早く結婚して子供作っちゃった方が絶対いいから。わたしなんか、いつまでひとり、ケバケバになったシートの上で眠らなくちゃならないんだって話よ」

わたし「山辺先生だって、いまの彼氏と長いじゃないですか」

山 辺「わたし自分名義でマンション買ってんだよ？」

わたし「ああ」

山 辺「あいつは駄目。欲がないの。金も持ってないし、夜も全然だし。デート行っても結局わたしがゼーンぶ出すの」

わたし「そうなんですか」

山 辺「俳優になりたいんだって」

わたし「いくつなんですか？」

山 辺「5つ下。だから私が高三の時にあっちが中一」

わたし「ああ、だから」

山 辺「写真見る？」

わたし「見せてくださいよ」

山 辺「(携帯写真を見せて)ただのイケメン」

わたし「イケメンならいいじゃないですか」

山 辺「でも家でテニミュテニミュ言われてたら頭痛くなるよ。何よ、テニミュって」

わたし「ジャンプの漫画で。そのミュージカルですけど」

山 辺「何だっけいいわよ、若いから。楽しそうで」

わたし「ああ……」

山 辺「あのさー。渋谷先生って、彼氏の携帯見たことある？」

わたし「わたしは、まだそういうのは」

山 辺「そう駄目なんだよねー。見ない方が余計なこと詮索しなくて済むし、幸せでいられるのもわかってるんだけど。あっちがお風呂入ってる

とすぐ手出しちゃう」

わたし「相手がイケメンだとそうなりますよね」

山 辺「最近のやりとりって LINE が多いじゃない。あれだと勝手に新しいメッセージ開くと既読なんのよ。でもスマートフォンも黙っちゃいられないからさあ、新しいメッセージがきたとき、2、3行だけ表示すんのよね。画面の上のところに。あれがチャンスなの。だから気をつけて読む」

わたし「それでも読むんですね」

山 辺「渋谷先生も気を付けて」

わたし「……うちはたぶん。大丈夫です」

山 辺「ほんとにー？」

わたし「やめてくださいよ」

山 辺「あ。ええねえ、そういえばひとつ聞いていい？」

わたし「何ですか？」

山 辺「何ー。あのレッスンって」

わたし「レッスン？」

山 辺「原さんの」

わたし「ああ、あの子、タレントの養成所みたいなの通ってるらしいんですよ」

山 辺「養成所？」

わたし「北川景子と同じ事務所がやってるらしいんですけど」

山 辺「何。じゃあの子、北川景子になっちゃうわけ？」

わたし「それはわかんないんですけど」

山 辺「そうなのよ。そんな簡単に北川景子になれるんだったら、わたしだって北川景子じゃない？」

わたし「ああ」

山 辺「やんなっちゃうよねー。タレントのそういうの通ってる子」

わたし「最近ほんと多いですよんね」

山 辺「アイドルも、今みんな中高生でしょ。いや、いいんだけどね。夢を持った方が。でも、ときどき違うよなー、って思うっていうか。こっちは保証できないじゃない、あの子たちの人生まで。だから目先のことだけにとらわれて欲しくないと思うよね。なりたい自分になるとか簡単ではないじゃない。この年になるとわかるけど」

わたし「嫌ですしね、教え子が裸で週刊誌載ってても」

山 辺「そうよー。見るか見ないか。微妙じゃない、何かああいうの」

わたし「はい」

山 辺「そういえば。ねえ聞いた？」

わたし「何をですか？」

山 辺「原さんの。池袋の奥入ってずらーってホテル並んでるところあるじゃない。あそこ、年配の男の人と歩いてたらしいよ」

わたし「えええ？」

山 辺「わたし驚いちゃって。うちのクラスの子が塾の帰りに池袋で見たって」

わたし「それはお付き合いしてるとかではなくて？」

山 辺「でも別の男とも歩いてたんだって」

わたし「……ああ」

山 辺「こんな言い方したくないけど、自業自得っていうか。それでストーリーされててもこっちもフォローできないわよ」

わたし「……はい」

山 辺「触りたいじゃない、可愛い女の子が誘ってきたら。男は、そういうの」

わたし「そうですね」

山 辺「だって、あのグラビアアイドルも刺されたよねえ」

わたし「誰ですか？」

山 辺「一時期テレビ出てたんだけど、名前が出てこない。何だっけ。ニュースでやってたじゃない。○○○○（タイムリーな事件）があつて一瞬で消えちゃったけど。タレント。知らない？」

わたし「わたしそーいうの疎いんですよね」

山 辺「こないだ職員室でも同じ話したんだけど、誰もピンと来てなかったんだよね。むかしさあ、うちで、女の先生の事件あつたじゃない。

彼氏に刺されて、荒川で見つかったやつ」

わたし「わたし……その先生のクラスだったんです」

山 辺「え、あ、そうなの？」

わたし「はい」

山 辺「ごめんね、何か」

わたし「いえ、全然。ずいぶん前のことなんで」

山 辺「何か、昔あつた事件をほじくり返すような番組でさあ、こんな下世話なの流しているのとか思ったんだけど、そのね、グラドルが涙ながらに答えてたわけよ。トラウマだとか。深夜に。だから、うちの中学だったんじゃないかなー。あの子」

わたし「あの子……」

山 辺「テレビも性格悪いよね。あーいうの面白いじゃない。他人のことだ

わたし「……」
し。○○○○もさあ、どうなっちゃうんだろうね。一体」

部屋にスーツ姿の男（以下、室）が入ってくる。

室 「すいません。遅くなっちゃって」

山 辺 「おい——」

山 辺 が室にグーパンチをする。

山 辺 「遅いわよ——」

室 「痛ってええ。何すかー」

山 辺 「あんたたちの会なんだからさあ、さつさと終わらせて来なさいよ」

室 「来てますよ。さつさと」

山 辺 「遅くまで学校残ったっていいことなんかないんだから。あんたは無駄が多いのよ、無駄が。だから遅くなんのよ」

室 「いいじゃないですか、別に」

山 辺 「いつも何やってんのよ？」

室 「仕事ですよ」

山 辺 「ほんとにー？」

室 「もう飲んでるんですか？」

山 辺 「まだよ」

室 「山辺先生、お酒飲むと面倒くさいからなー」

山 辺 「あんた殺すよ」

室 「怖えええ」

山 辺 「ねえ」

室 「はい？」

山 辺 「○○○○ってどうなっちゃうんだと思う？」

室 「知らないっすよ」

山 辺 「ビール？」

室 「はい」

山 辺 「っていうか、遅いわ。ビール」

山 辺 が壁に取りつけの電話をかける。

※以下、山辺のセリフ、わたしと室のセリフが同時進行していく。

山 辺 「(メニュー見ながら)あの、すみません。ビール一つ追加お願い
ていいですか。はい、お願いします。あとさっき注文したのまだで
すか?もう結構待ってるんですけど。はい、早く。お願いします」

室 「ごめん。遅くなった」
わたし「何やってたの?」

室 「問題作ってた。明日の授業で使うやつ」

わたし「うん……」

室 「どした?」

わたし「あのさあ」

室 「うん」

わたし「森田ユカって知ってる?」

室 「森田?」

わたし「あのさあ」

山 辺 が電話を切って、デンモクをわたしに渡そうとする。

山 辺 「渋谷先生(何か歌う?)」

すると応接室のスペースに大人になった森田が現れ、つぶやく。

森 田 「(山辺のセリフを遮って)もしもわたしが、あの子に殺されそうに
なったら代わりに殺されてくれる?」

わたし「え?」

室 「すみません、ちょっと便所行ってきます」

山 辺 「わかる?出て右よ、出て右」

室 「はいはい」

室 が部屋を出ていく。

山 辺 「もー。ビール遅いわよねえ。何やってんのかしら……」

山 辺 が部屋を出ていく。

わたしがひとり部屋に残され、やがて山辺を追って部屋を出ていく。

【6】

応接室。
森田の前の机には体操着が置かれている。

森田「だから。無理なんで」

時田がスーツ姿のきちっとした身なりで立っている。

森田「今日の撮影そういうんじゃないですか？」

時田「ユカちゃん……」

森田「だから言ってるじゃないですか。体操着、着たくないって」

時田「わがまま言わないですよ」

森田「わたしもう30手前ですよ？」

時田「関係ないでしょ」

森田「関係ありますよね。こないだのミーティングで今後の方向性決めたじゃないですか。おかしくないですか？」

時田「そうなんだけど。もうユカちゃんもいい歳だしさあ、やっぱり脱ぎナシはキツイってー」

森田「いい歳なのは自分でもわかってるから言ってるんじゃないですか」

時田「わかってよー。こっちもユカちゃんのために仕事してんだからさ」

森田「だからって」
時田「お願い。とりあえず着ちゃって。ユカちゃんだってお金欲しいでしょ？」

森田「おかしいですよ。普通に考えてくださいよ」

時田「考えたよ、すっごい考えた」

森田「え？じゃあ、それだけ考えても結果わかってないってことですか？」
時田「そうじゃない。そんなこと俺言っていないじゃない」

森田「言いましたよね、あの時、ミーティングで。ちゃんと営業してくれるって。わたしのことプロデューサーや代理店にもプロモーションしていくって」

時田「言ったけどさあ」

森田「じゃあ何でこうなるんですか？」

時田「そんな言った言わないで怒らないですよ」

森田「だって」

時田「社長に言われちゃったんだもん。仕方ないじゃない？」

森田「……」

時田「わかって。この情報社会、回転早いよ。タレントも、ほんと」

森 田「じゃあミーティングで言ったのって何だったんですか？」

時 田「正直どこも嫌がるのよ。ユカちゃん出しても数字とれないし。そう
なるとさあ、脱ぐぐらいしかないってー。体操着、まだ全然いいじ
やない。ヌードじゃなかっただけさあ」

森 田「……このままいくと消えますよね、わたし」

時 田「大丈夫。ユカちゃんのご機嫌は全部わかってるから。わかっているから
言っているから」

森 田「嘘ばっかり」

時 田「(森田に執拗に触れながら) じゃあ、トイレ行っちゃおう？」

森 田「気軽に触んないでもらっていいですか」

時 田「もう怒んないですって。俺はユカちゃんの味方だから」

森 田「味方とか言っちゃって全然じゃん」

時 田「あの時から何も変わんないって。場末の汚ねえカラオケでさあ、お
互いに誓ったじゃない。この業界でやって行こうって。なのに今更
なんで嫌がるわけ？」

森 田「あんたとやるのも飽きたから？」

時 田「(森田に執拗に触れながら) 便座壊すほどヤつといてよく言うよ」

森 田「だから気軽に触んないでもらっていいですか」

時 田「売れるもん売って割り切ろうよ。いい歳なんだし。昔とは違うじゃ
ない。俺ら」

森 田「淫行くそ男が偉そうに……」

時 田「ねー、夢見ちゃってたよねー。あん時は」

森 田「……」

時 田「(森田に執拗に触れながら) わかってよ。俺ら長い付き合いじゃな
い。ね？」

森 田「じゃあ殺してよ。先生みたいに」

時 田「……」

森 田「なーんちやって」

時 田「冗談。もういいから」

森田の携帯電話が鳴る。

時 田「俺、出てるから。とりあえず体操着着て。撮影はじまっちゃうから」

時 田が楽屋を出ていく。

森田「ほれ見たことか」

音楽が大音量で鳴る。

森田は苛立ちながら、鳴りっぱなしの電話に出る。

森田「電話で」もしもし………？」

暗転

カラオケのモニターに文字が映し出される。

ほらほら、もう起きななな。

いつまでも寝ているの。

いつまでもお前の寝たふりが通用すると思うなよ。

【7】

学校の教室。

腹が大きくなった妊婦の教師（以下、水野）が、体操着姿で机に突っ伏したシヨークに声をかける。

水野「渋谷さん」

シヨーク「え？」

水野「大丈夫？」

シヨーク「すいません。走ってたら何か、駄目で」

水野「保健室行かなくて平気？」

シヨーク「ここで。大丈夫です」

水野「でも顔色あんま良くないね。朝ごはんは？」

シヨーク「食べてないです」

水野「じゃあ貧血かな」

シヨーク「生理だから、ちよつと具合良くなって」

水野「何日目？」

シヨーク「2日目です」

水野「一番キツイ日だね」

シヨーク「もう、お腹の火山が噴火して地底人たちがわーって騒いでるみたいになっちゃってます」

水野「そっか」

シヨーク「すみません」

水野「ううん。(お腹に手を当てる)先生もよくでっかい怪物が暴れてるみたいになってたから」

シヨーク「ああ」

水野「気持ち悪くはない？」

シヨーク「大丈夫です」

水野「座ってたら少しは落ち着くかな？」

シヨーク「水野先生」

水野「ん？」

シヨーク「大丈夫ですか、授業」

水野「うん。わたし5限目の授業ないから」

シヨーク「ああ」

水野「慣れた？学校」

シヨーク「はい」

水野「みんなと仲良くできないとかあったら先生に相談してね。渋谷さん、引越してきたばかりだから」

シヨーク「はい」

水野「先生も座ってもいい、いい」

シヨーク「どうぞ」

水野がシヨークの隣にゆっくり腰かける。

シヨーク「何か月ですか。お腹」

水野「4か月。ようやく安定してきたところかな」

シヨーク「妊娠してるとおっぱい張りませんか？」

水野「よく知ってるね」

シヨーク「まあ、はい。おっぱいのことなんで」

水野「ああ、そうなんだ」

シヨーク「何かすみません」

水野「渋谷さんって物知りさんなんだね」

シヨーク「そんなことはないです。はい」

シヨークがもじもじしている間。

しばらくして、ゆっくりと口を開く。

シヨーク「……あの、変なこと聞いていいですか？」

水野「どうしたの？」

シヨーク「先生の恋人ってどんな人ですか？」

水野「何で？」

シヨーク「いや、何か気になって」

水野「あんま生徒に言っちゃいけないんだよね、そーいうの」

シヨーク「ああ……」

水野「(はにかんで) でもいいか、渋谷さんなら」

シヨーク「え？」

水野「自分は何者かになれるって信じてる人」

シヨーク「例えばどんな？」

水野「何だろうなあ。例えば、自分が神様になりたいと思ったとするでしょう。やりたいことや欲しいものに対して。そしたらそれが手に入るって信じてるの。自分は神様だから大丈夫って」

シヨーク「すごいですね」

水野「彼ね、恐竜とか前世とか、宇宙のこととか。目に見えないものばかりに興味を持つ。大きい子供みたいだよな」

シヨーク「何でお付き合いしたんですか？」

水野「わたしが全然知らない世界を知ってたからかな」

シヨーク「知らない世界？」

水野「でも大人になるって、そうもいかないことも多いのにね」

シヨーク「先生は？」

水野「なに？」

シヨーク「結婚したらいなくなるんでしょう？」

水野「もしかしたら、結婚はしないかも、しれないかな。悲しいけれど」

シヨーク「何で？」

水野「何でだろうね」

シヨーク「お金ですか？」

水野「それもそうだけど、そんなものは大きいものではなくて。お互いの育ってきた環境があるでしょう。食べ物とか好き嫌いとか。許せるものとか許せないものとか。そーいうのも含めて折り合いがつかなくて、どうしようかな、と思ってるんだ」

シヨーク「先生は彼氏さんのこと好きですか？」

水野「うん。好きよ」

シヨーク「なら、それって何だか」

水野「先生がだらしなからさ。しっかりしてたら良かったんだけど。どっかで、彼は特別なんだ。だから仕方ないんだって。それにばっか

り流されちゃって、ちゃんと出来なかったんだよね。関係性とか。どう考えてもおかしいのに。妄想ばっかしてて。先生も大人なんだから現実と向き合わなくちゃならないのにな」

シヨロコ「先生は頑張ってますよ」

水野「ありがとう」

シヨロコ「……」

水野「(お腹に向って)おーい。おーい。だからキミは、自分の目で見るものだけを信じて生きなくちゃ駄目なんだよー。聞いてるかーい?」

シヨロコ「聞こえてるんですかね?」

水野「どうかね。わかんないけど」

シヨロコ「はい」

水野「あーあ、一体どんな怪物が出てきますかねえ」

シヨロコ「……」

水野「さっきの他の人には内緒ね。怒られちゃうから、先生」

シヨロコ「はい」

水野の携帯電話のバイブ音が鳴る。

シヨロコ「あのお、先生」

水野「(携帯を確認する)あ、ちよつとごめんね」

シヨロコ「はい」

水野「(電話で)もしもし」

シヨロコ「先生は、何で死んじゃったんですか?」

大音量で音楽が鳴ると、カラオケルームで電話をかけている片桐のシルエットが映る。

それに合わせてカラオケのモニターと下手の壁に文字が映し出される。

この電話の後、20時間経って、

水野先生が、荒川の河川敷で、

ブルーシートにくるまれた状態で発見された。

犯人は、同日から行方不明になっていた、先生の彼氏だった。

水野が教室を出ていくと、片桐も部屋を出ていく。

シヨークは、水野の後を追っていく。

【8】

カラオケルーム。

わたしが電話をしながら、部屋に入ってくる。

わたし「(電話で) はいはい、わたし。今大丈夫。飲んでた。うん、うん。

大丈夫、室先生も一緒。再来週、大丈夫？ うん。場所わかる？ お店の。恵比寿降りて東口出てちよつと行ったとこ」

部屋に室が入ってくる。

わたしが室をちらつと見ると、室が携帯のカメラでわたしを撮影し始める。

わたしが何度も室の携帯カメラを遮ろうとして、ふたりはカップルらしくじゃれ合っているように見える。

わたし「お母さんがイタリアン嫌だつて言ったから和食にしたよ。場所わからなかったら交番で聞いて。改札出てすぐのところにあるから。うん。何かあったら連絡して。はい、はい」

わたしが携帯電話を切る。

わたし「(笑いながら) ちょっとー」

室「お母さん？」

わたし「そう」

室「何だつて？」

わたし「再来週の。食事会の案内届いたつて」

室「おお。良かったじゃん」

わたし「山辺先生、大丈夫だった？」

室「ちゃんとタクシー乗せたよ。まだ飲んだつて言うから、無理やり押し込んで。彼氏さんに電話したら、これから先生の家向かってくれるつて。だから大丈夫」

わたし「いい彼氏だね」

室「いやあ。相撲部屋の弟力士があんな気持ちになるんだろうなつて思つたわ」

わたし「何、弟力士つて」

室 「例えよ。苦難している男たちの例え」

わたし 「ほんと山辺先生のこと好きだよねー」

室 「全然嫌い。大嫌い。俺、可愛い子が好きだから」

わたし 「はいはい。わかったよ」

室 「あ、ねえ。結婚式の映像。どうなった？」

わたし 「知り合いに頼んで進めてもらってるよ。だから生い立ちとか振り返ってまとめておいてくださいって」

室 「めんどくせーな」

わたし 「だからかな。最近、変な夢ばっか見るよ」

室 「どんな？」

わたし 「人をバタバタ殺す夢」

室 「何それ」

わたし 「わたし、歌を歌ってるんだよね。カラオケボックスみたいな場所で。

最初は普通に歌ってんだけど、そのうち何か刃物を持った男が入ってくるの。よくわかんないけど。それでわたし、中学のとき好きな先生がいたんだけど、その男が、その先生をそこで刺し殺そうとするのね。馬乗りになって。それが何か腹が立って、そいつの頭をマイクで殴るの。何度も何度も。そしたら辺り一面真っ赤になっちゃってね。それをわたし、斜め上くらいからずっと見てて。自分が漫画描いてるみたいで。それで途中で気づくの。あれ、これ夢じゃないって」

室 「疲れてんじゃない？」

わたし 「怖いよね。夢でも。殺すとか殺されるとか。そーいうの」

室 「なあ」

わたし 「何？」

室 「俺のこと好き？」

わたし 「何、急に」

室 「ねえ。好き？」

わたし 「女の子じゃないんだから」

室 「男だっただまには甘えなくなったりするよ」

わたし 「好きよ」

室 「(外国人のモノマネをしながら) あなたは神に誓いますか？」

わたし 「やめてよ」

室 「予行演習。俺、ショーコちゃんのこと好きだから」

わたし 「はいはい、ありがとう」

室 「じゃあさ。もしも俺が悪いことしちゃったらどうする？」

わたし「わかんない。実際そうだったら違うかもしれないし」

室「答えてって」

わたし「そんなの怒るよ。ショックだと思うし、たぶんすごい怒る。もしかしたら嫌いになるかもしれない」

室「そしたら明日世界が終わるとして、でも俺が悪いことしちゃったら？」

わたし「さっきから、どんな質問？」

室「いいからいいから」

わたし「いいよ。もう、ね。そういうことなんだから。不安になっちゃう、そんな変なことばかり聞かれてたら」

室「まあ、そうか」

わたし「頼みますよ」

室「考えておくわ」

わたしが室にグーパーパンチをする。

室「痛ってええ」

LINEの着信音が鳴る。

室「あ、ごめん」

わたし「LINE。」

室「(一瞬LINEを確認して)……………」

室が携帯電話をしまう。

わたし「いいの？」

室「後で返す。既読にしちゃうとまた面倒くさいから」

わたし「誰？」

室「山辺先生。家着いたって」

わたし「……嘘？」

室「(よく聞こえなかったふりをする)何て？」

わたし「何でもない…」

室「今日、うちでいいの？」

わたし「うん。着替えも持ってきた」

室「置いてけばいいのに」

わたし「いいよ」

室 「毎回持ってくるの面倒くさくない？」

わたし「別に下着程度だから」

室 「でも結婚するんだからさ」

わたし「(冗談っぽく)隠れて匂いかがれたりしてたら嫌だもん」

室 「じゃあ今日しよ」

わたし「こないだもしてあげたじゃん」

室 「いつの話？」

わたし「ちよっと前」

室 「結婚するんだから、俺ら。良くない？」

わたし「良くない良くない良くない」

室 「何が嫌なの？」

わたし「前にも言ったけど得意じゃないから、やっぱり」

室 「とか言ってーほんとはー」

わたし「本当に。ごめん」

室 「……わかった」

わたし「努力はするから」

室 「いいよ。気にしてないから」

わたし「うん……」

室 「そういえば、さっきの」

わたし「さっきの？」

室 「森田ユカ。さっきヤフーで調べたらさあ、ヤンジャンの表紙やってたわ」

わたし「そうなんだ」

室 「俺、毎回買ってんのにさ、ヤンジャン。全然わかんなかった」

わたし「ああ……」

室 「でも芸能人は大変だよなー。こんな知らないタレントでも刺されたらヤフーニュース載っちゃうんだもんさ」

わたし「それは一緒でしょ？」

室 「何が？」

わたし「うちらと」

音楽が大音量で鳴る。

わたしが部屋を出ていく。

室はそれを追うようにして部屋を出ていく。

【9】

帰り道。

原が携帯をいじりながら歩いてくると、同級生たち（以下、蟹江・北条・柳下）に呼び止められる。

蟹江「原ちゃん？」

原「え？」

柳下「うわー、原じゃん」

原「おお、お疲れー」

柳下「こんなとこで何やってんの？」

原「あー、レッスン」

柳下「レッスン？」

原「え、そっちは？」

蟹江「うちら塾の帰りー」

原「そうなんだ」

北条「え、誰待ってんの？」

原「親」

北条「迎え？」

原「そう」

蟹江「いいなー」

原「そんなことないよ」

蟹江「だってうちの親なんて絶対迎えなんて来ないよー」

北条「うちも。勝手にどうぞって感じ」

蟹江「ねー？」

原「うちの親だって放任主義だよ」

蟹江「そんなことないでしょー」

原「最近だって。送ってくれるようになったのも。ほんと」

北条「えー、でもいいじゃん」

蟹江「羨ましい、大事にされてる感じでー」

原「じゃあ交換する？」

蟹江「何を？」

原「うちの親と」

蟹江「何言ってるんの、まじでー」

北条「ウケんねー」

女子たちが笑うが、蟹江の笑い方は引き笑いで耳につく。

蟹江「え、っていうか、それよりさー。原ちゃん、大丈夫？」
原「は？」

蟹江「違う違う、ごめんねー」

北条「原ちゃんモテるからー」

蟹江「おっぱい大きいしね」

北条「うちらにできることあったら言っただろ？」

蟹江「そうだよー、ねー？」

北条「言っただろー」

原「じゃあさ」

北条「何ー？」

原「その笑い方やめてくれる？」

蟹江「え、ごめん……」

北条「行こっか？」

蟹江「うん……」

北条「じゃあね。原ちゃん」

蟹江と北条がその場を立ち去っていく。

柳下「金いるなら紹介しよっか？」

原「はあ？」

柳下「俺の先輩、エロい動画集めてっから。お前に8割、俺にマージンで2割」

原「死ねよ」

柳下「つーか、トイレのカメラって自作自演？」

原「……何で？」

柳下「うわ、まじ？」

原「違うし」

柳下「お前、何を求めてやってんの。そういうの」

原「（無視をして）……」

柳下「ブスが……」

柳下がその場を立ち去っていく。

原「わたし、悪くないから……」

大音量で音楽が鳴る。

原がその場を立ち去っていく。

【10】

カラオケルーム。

百瀬の手には漫画の原稿がある。

百瀬「何で？」

ふたりの雰囲気は悪く、言葉も重々しい。

百瀬「言ってるじゃん。何でさあ、オチで森田ユカ殺さないの？」

シヨココ「それは何か。死ぬのは違うかなと思って」

百瀬「ここで森田ユカが死んで地面が真っ赤になってさあ。かつこいじゃん」

シヨココ「うーん。でも死ななくてもいいじゃん。ここで」

百瀬「あかさ。渋谷、あんた100万獲る気あんの？」

シヨココ「あるよ」

百瀬「だったらいいじゃん。悪いやつなんだよ、森田ユカ」

シヨココ「そうなんだけど」

百瀬「そいつがここで刺されてハッピーエンド。それで良くない？」

シヨココ「それって本当に面白いのかなあ？」

百瀬「はあ？」

シヨココ「うちの自己満足になってない？それ」

百瀬「あんたのオチじゃ弱いから手伝ってあげてんじゃん」

シヨココ「そうだけど。わたしの漫画だし」

百瀬「こつちがこんだけあんたのこと考えて協力してんのに。何であんた、わたしの言うこと聞けないの？」

シヨココ「もちやんのことは好きだけど、それって違うじゃん」

百瀬「何が違うの？」

シヨココ「だからわたしの漫画じゃん」

百瀬「でも、わたしも協力してんじゃん」

シヨココ「そうだけど。これはわたしのお話なんだよ。わたしはわたし。わたしだけのものなの」

百瀬「でもさ」

シヨココ「世界なの」

百瀬「でも、違うじゃん」

シヨーク「いいの。わたしが違うと思ったら違うの。そーいう世界なの」

百瀬「……」

シヨーク「ごめん」

百瀬「いいよ、もう。じゃあ」

百瀬が煙草を取り出して、慣れない手つきで火をつける。

シヨーク「あと」

百瀬「何？」

シヨーク「無理して煙草吸ってんのも違うと思う。ちよつと」

百瀬「あれか。どうせわたしのことハブリたくなっただんでしょ？」

シヨーク「え、違うよ」

百瀬「そうだよ、絶対そう。あんたも小林と一緒になんだよ」

シヨーク「……」

百瀬「裏切り者」

シヨーク「じゃあさ、もちちゃんは何でわたしのこと助けてくれなかったの。裏切り者はそっちじゃん」

百瀬「裏切ってないじゃん」

シヨーク「もちちゃんズルいよ。こんなん描いてんなら直接言えばいいじゃん。何でトイレ逃げちゃうの」

百瀬「あれは逃げてない」

シヨーク「この主人公のがよっぽど頑張ってるじゃん！戦ってるじゃん！」

百瀬「あれは逃げてないし」

シヨーク「もちちゃんは馬鹿だ！馬鹿馬鹿馬鹿！」

百瀬「自分だって真面目ぶってヘラヘラして、偽善者！」

シヨーク「わたし偽善者じゃない！」

百瀬「あんたの描く漫画なんかつまないんだよ！」

百瀬がシヨークの漫画を、床にばらまいて部屋を乱暴に出していく。

シヨークが悲しそうな顔をしてうつむく。

そのときメールの着信音が鳴る。

シヨーク「メールを確認しながら……」

しばらくして扉がノックされる。

シヨーク「はい？」

シオリがカラフルな傘を持って部屋に入ってくる。

シオリ「シヨークちゃん。来ちゃった」

シヨーク「今日は駄目って言ったじゃん」

シオリ「でも帰っちゃったじゃん、百瀬さん」

シヨーク「……」

シオリ「百瀬さん帰った？ ってメールしたのに無視すんだもん」

シオリが持っていた傘を広げる。

シオリ「見て見て」

シヨーク「どうしたの、それ？」

シオリ「何か降ってきそうな感じだったから、さっき買ったよ」

シヨーク「今日、天気晴れだったよ」

シオリ「でもいっぱいお小遣いもらったから」

シヨーク「誰から？」

シオリ「(コーラを見て) これ口付けてないやつ？」

シヨーク「うん……」

シオリ「もらっていい？」

シオリがコーラにストローを指して一口飲む。

シオリ「シヨークちゃん、久しぶりだね。一緒にカラオケ」

シヨーク「漫画の締切近かったから」

シオリ「またまたあ、わたしのこと避けてたんじゃないの？」

シヨーク「じゃあ、もしもそうだったらシオリちゃんどうするの？」

シオリ「え、冗談じゃーん。怒らないでよ」

シヨーク「怒ってないよ」

シオリ「でも機嫌悪くない？」

シヨーク「生理だから」

シオリ「何日目？」

シヨーク「二日目」

シオリ「うげえ。それしんどいねー」

シヨーク「うん……」

シオリ「じゃあわかった。わたしが漫画描くの手伝ってあげる」
シオーコ「いいよ」

シオリ「(渋谷の漫画を掴んで) いいからいいから」
シオーコ「いいよ、いいよ。(シオリを振り払う) いいよってば！」

シオリ「ごめん。そんな嫌がると思わなかったから」

シオーコ「シオリちゃんさあ、何でわたしと一緒にいてくれるの？」

シオリ「楽しいからじゃん」

シオーコ「嘘」

シオリ「嘘じゃないよお」

シオーコ「わたしが馬鹿で単純だからでしょ。わたし馬鹿者だよ！馬鹿！馬

鹿！馬鹿！しかも、わたしゴミブスだし。アレだもんね。一緒に

いたらもつとシオリちゃん可愛いって思ってもらえるもんね。だ

からなんでしょ？」

シオリ「わたしも全然可愛くないよ？」

シオーコ「何言ってるんだよ。わたしのこと馬鹿だと思ってるの！」

シオリ「え、どっち？」

シオーコ「もうわかんない！わかんないけど、シオリちゃんのが可愛いのに

可愛くないとか言われるとムカつくじゃん」

シオリ「ごめん」

シオーコ「自分のことよくわかってるくせに」

シオリ「でも、シオーコちゃんを馬鹿だなんて思っていないよ」

シオーコ「だったら、あの金髪の人と、わたしがいるのに、何であーいうこ

とするの？」

シオリ「でも、これはわたしの育ってきた環境があるじゃない。食べ物とか

好き嫌いとか」

シオーコ「シオリちゃん、水野先生のこと嫌いななの？」

シオリ「好きだよ」

シオーコ「なのは何で。平気で他人のこと傷つけられるの？誰かの、水野先

生とか、小林さんとか。シオリちゃん以外の人の気持ちって考え

たことあんの？」

シオリ「小林さん？」

シオーコ「したんてでしょ。小野先輩とも」

シオリ「してないよ」

シオーコ「もう、何で嘘つけるの？小林さん泣いちゃってたんだよ？」

シオリ「男の人とエッチすることは悪いことじゃないんだよ」

シオーコ「そんなただのヤリマンじゃん」

シオリ「それじゃあ、シヨークちゃんは一生エッチなことしないの？」
シヨーク「しないよ」

シオリ「でも、避けては通れないものもあるんだよ？」

シヨーク「シオリちゃん、気持ち悪いよ。すっごく、そーいの」

シオリ「ならシヨークちゃんは、わたしの気持ちを考えたことってある？」

シヨーク「普通考えなくても、相手の気持ちなんてわかるじゃん」

シオリ「わかんないよ、そんなの」

シヨーク「わかるよ」

シオリ「(笑顔で)じゃあ、うちの親殺してよ」

シヨーク「……何、言ってるの」

シオリ「だよね？」

シヨーク「何でそーいうこと平気で言えるの？」

シオリ「こんなの妄想じゃん」

シヨーク「でもそれって違うじゃん。嘘じゃん」

シオリ「それがシヨークちゃんにとって嘘になっちゃうなら、嘘だね」

シヨーク「そうだよ。そんなの、ただの嘘だよ」

シオリ「嘘だとしても、そうなんだよ。生まれてからずーつとわたしはこうなの。信仰とか正義とか。人よりもちよつと変なんだよ、シヨークちゃんにとったら嘘なんだよ。でもこれが正しいの。それで、シヨークちゃんと何も変わらないんだよ」

シオリが帰ろうとして、立ち上がる。

シオリ「帰るね」

シヨーク「ねえ。シオリちゃん家って、本当に殴られたりするの？」

シオリ「心配しなくていいよ。わたしには神様がいて、ちゃんとしたら見守ってくれてるんだって言われたから」

シヨーク「神様なんていないよ」

シオリ「もうシヨークちゃんには関係ないでしょ？」

シヨーク「……」

シオリ「あと、貸してた全部CDあげる」

シヨーク「え、でも」

シオリ「わたしもういないから。そのかわりさ、わたしの漫画描いて。たぶん、そのうち、わたしの人生がすごいリアルでもって、シヨークちゃんの前に現れるからさ。そしたら、ちゃんと描いてよね。漫

画」

シヨーク「そのうちっていつ？」

シオリ「ノストラダムスの大予言で、人間はみんな死んじゃうんだって。だからその前？」

シヨーク「死なないよ。ノストラダムスも嘘だもん」

シオリ「でも何か降ってくるかもしれないよ。怪物みたいな、恐怖の大王が」

シヨーク「ないよ。空からは何も降ってこない」

シオリ「それってつまんないね」

音楽が悲しく鳴る。

シオリが傘を閉じて部屋を出て行く。

それと入れ違いに、現在の森田と遠藤と小林が部屋に入ってくる。

※以下、過去と現在のセリフが同時進行していく。

シヨーク「リアルって何だよ」

森田「懐かしいね。まだあるんだ、ここ」

遠藤「ねー」

小林「ほんとだね」

森田「あ、ねえ。アレ頼んでいい。明太マヨポテト」

小林「どうぞ」

遠藤「好きだよねー、それ」

シヨーク「今のこれがリアルじゃん」

森田「(小林に) 飲みもの何だっけ？」

小林「グレープフルーツジュース」

シヨーク「いるとかいないとかそーいうことじゃなくて、シオリちゃんが信

じた神様って一体何だったの？」

森田「わたし飲んでもいい？」

小林「うん」

遠藤「わたしも」

森田が壁に取りつけの電話をかける。

森田「あの、すいません。注文いいですか？」

シヨーク「ねえ、シオリちゃん」

森田「あの、グレープフルーツジュース一つ。ビール二つと明太マヨポ

テト一つお願いしたいんですけど。はい、お願いします」

シヨーク「わたしは、ずっと漫画を描かなくちゃいけないの？」

シヨークが部屋を出ていく。
森田が電話を切る。

小林「お仕事大丈夫だった？」
森田「ごめんね、遅くなっちゃって」
小林「ううん、急だったから。ごめんこちらこそ」
遠藤「珍しいよねー」
森田「はじめてなんじゃん。小林さんから電話来たの」
遠藤「そうかも」
小林「いや、ちよつと会いたくなって。ふたりに」
森田「最近どうしてるの？」
遠藤「まあ、仕事がねー。偉くなっちゃったから年齢的に」
森田「だよー。わたしも今度連ドラ出るかもしれない」
遠藤「えー、ドラマ出るの？」
森田「うん。まだわかんないんだけど。前向きな方向で進んでるんだよね。だから結構バタついてて、今」
遠藤「へー」
小林「そうなんだ」
森田「まじうちら人気商売だから頭使わないと生き残っていけないし、案外肉体労働だから。ハンパないの。それで毎日ブログとか書かないといけないじゃん。プライベートもないっていうか、嫌になっちゃうよ、ほんと」
遠藤「そっかー」
小林「大変だね」
森田「(笑う) ははは」
小林「何？」
森田「いやあ。相変わらず、変わらないなーと思って」
小林「えー、何が？」
森田「何か何か。小林さん、昔っからこうだったじゃん」
小林「えー？」
遠藤「わかる。落ち着いてるっていうか。だからかもしれないけど」
小林「そうでもないよ」
森田「あ、結婚したんだよね？」
遠藤「ねー」
小林「うん、そう」

森田「おめでとう」
小林「ありがとう」
森田「びっくりだったんだけど。何も言ってくれなかったじゃん、うちに。まさか小林さんが小野先輩のことそんなに頑張ってると思わなかったから」
小林「ああ……」
森田「え、いつから付き合ってたの？」
小林「あれから高校同じところ行って。仲良くなって、告白して」
森田「小林さん告白とかするんだ？」
小林「まあ」
森田「びっくりー。すぐくない？」
遠藤「すぐはないでしょ」
森田「だって、それが結婚だよー？」
遠藤「確かに。わたしはじめてだったもん。芸能人がスピーチしてるの」
小林「あれは、あっちのお友だちで」
遠藤「豪華だったよねー」
森田「えー。じゃあ呼んでよー。芸能人ダブルだったのに。わたしもいたら」
遠藤「え。来れなかったんじゃないの？」
森田「招待状届かなかったからさー」
遠藤「あー、そっか……」
小林「ごめん」
森田「気にしないでー。わたしも男変わるたびに住所コロコロ変えちゃってるし」
遠藤「うわー」
森田「だって別れた後、ダラダラなったりするじゃん？」
遠藤「そうね」
小林「そうかなあ……？」
森田「小野先輩、元氣？」
小林「うん……」
森田「もう全然会ってない。あの人」
小林「……」
森田「いつだっけ、小林さん走ってどっか行っちゃったの」
遠藤「あー、あれねー」
森田「うちら超焦ったからー、ねー？」
小林「……ねえ」

森田「ん？」
小林「今の嘘でしょ」
森田「え、何が？」
小林「小野と連絡とってるでしょ？」
森田「小野って。先輩のこと？」
小林「結局、全部嘘なんですよ。さっきのドラマの話も。そういうの全部」
遠藤「何、どうしたの？」
森田「もう勘弁してよー」
小林「勘弁してほしいのはこっちなの」
森田「じゃあ、それ何の根拠で言ってるわけ？」
小林「書類を出して」調査、してもらったから」
遠藤「え」

小林がカバンから書類を出して、森田の前に置く。

森田「は……？」
小林「小野にちよつかい出すのやめてもらいたいんだけど」
森田「あんた最低」
小林「どうして？いつから？何で？」
森田「やつばおかしいと思ったんだよねー。結婚式にも呼ばないのに急に電話かけてきてさあ。わたしの携帯の番号、どうやって知ったの。遠藤ちゃん？それとも小野さん？」
小林「質問に答えてよ」
森田「何となく。ちよつとぐらいいいかなーって」
小林「あんたって……昔っからそう。自分のことばかりで」
森田「大丈夫だって。遊びだし。もう終わってるから」
小林「あんなメール送ってきておいて、よくそんなこと言えるね」
森田「旦那の携帯も見たんだ」
小林「見たよ。写真も。ホテルでふたりして写ってるやつ」
遠藤「ホテル？」
森田「ウケンだけど。あの人そんなの保存してんの？」
小林「自分がそう指示したんじゃないの？」
森田「ちよつと待って、指示って何だよ。何十年ぶりに会ってるのに、ホテル行こうって言い出したのはあんたの旦那だから」
小林「そんなこと聞いてない！」
森田「だったら、ギャラちょうだいよ」

小林「ギヤラ？」
森田「あんたの旦那の惨めな遊び相手として。清算？そーいうのってお金
必要じゃん」
小林「ふざけないでよ」
森田「自分は幸せなわけでしょ。分けてよ、わたしにも」
小林「お金なんて払えないから」
森田「じゃあ、わたしに子供がいたら？」
小林「(すこい顔をして) え？」
森田「うっわ、今の顔まじヤバいんだけど。(遠藤に) ねえ、見た？」
遠藤「いや……」
森田「引いた？まじ最低でしょ、あたし」
小林「またそれも嘘？」
森田「はあ？」
小林「いつも全部自分が嘘ついてんのに他人のせいにして……」
森田「大丈夫。産まないから。つていうか今生まれて来られちゃつてもさ
あ、困るし。…じゃあ、もうひとつ小林さんを薬にしてあげる。実
はこの子、誰の子かわかんないのね。だからあんたの旦那もいらな
い。安心して」
小林「それでいいの？」
森田「はあ？」
小林「それって幸せ？」
森田「何が？」
小林「可哀想」
森田「こっちは今頑張らなくちゃなんないの。ドラマ出たり映画出たり。
グラビアから女優いって、これからの。そのためなら、何でもす
るの。身体も売るし、男もいらぬ。何だつてする。何だつてする
の」
小林「森田さんじゃ無理だよ」
森田「あんたに何がわかるの？」
小林「言われてたじゃない、昔。あの子に」
森田「あの子つて誰よ」
小林「覚えてないの？神様がそう言ってるから、つて」
森田「都合のいいときばかり昔の話、持ち出してこないでよ」
小林「あなたに神様が味方してくれるはずない」
森田「だから浮気されるんですよ。自分が卑屈だから。当たり前障りない感
じで生きてきて」

小林「わたしはわたしなりに頑張ってきたから」

森田「あんた知ってる？旦那になんて言われているか？」

小林「何よ？」

森田「重苦しいって」

小林「は……？」

森田「こっちの様子ばっか窺ってて。だから女として魅力も感じないし、ぶっちゃけ別れたらいいんだって。でも良かったね。別れたいって言うたら殺されそうだから、言わないんだって」

小林「……」

森田「やっぱ。あんた昔っからほんと変わらないわ」

小林「……」

森田「ありがとねー、今日は呼んでくれて。お金も冗談だから」

森田が部屋を出ていく。

遠藤「ちよっとー」

音楽が迫ってくるように鳴る。

森田を追いかけて、遠藤が部屋を出ていく。

小林がひとりになると、狂ったように自分を殴りつける。

そしてバックから包丁を取り出す。

カラオケのモニターに文字が映し出される。

「神様のくせだ」

それって、キミが、勝手に、

神様って、呼んでるだけでしょ？

小林「じゃあ、あなたは誰なの？」

遠藤が部屋に戻ってくると、入れ替わりに小林が包丁を持って部屋を出ていく。

それを遠藤が血相を変えてもう一度追いかけて行く。

学校の応接室では、手にトイレのビデオカメラを持ったわたしが入ってきて、そのビデオカメラを再生する。

わたしは茫然とした顔になっていく。

ショーコの前を、顔が分からない複数の女子たちが現れ、彼女たちは

無機質に動きながら会話を始める。
そのどれもが他愛もない噂話である。

- ⑦ 「聞いてよー。アイツ、LINE無視してんの。既読つかないの」
④ 「まじで？」
⑦ 「ありえないでしょー。超むかつくんだけど」
④ 「あの男は？」
⑦ 「あー、アイツは彼氏ズラしてくるから切った」
⑦ 「つかつか、こないだ知り合った人超やばくて」
④ 「どこで知り合ったの？」
⑦ 「LINE」
⑦ 「何で？」
⑦ 「わかんない。あつちから急にLINE来て。体操着来て写真撮らせ
てほしいってすんごい頼まれた」
④ 「それまじ怖いー」

- A 「ねえねえ、3組の子から変なこと聞いちゃった」
C 「え、何？」
A 「数学の教育実習生とあの子、出来てるらしいよ」
B 「え、まじで！」
C 「わたしあの子きらいー」
A 「わかるー」
B 「全然話変わるんだけどさ」
C 「うん」
B 「犯人捕まったらしいよ。○○○○(タイムリーな事件)」
A 「え、どれー？」
B 「やってんじゃん。テレビで」
C 「わたしテレビ見ないし。つか、毎日犯罪起こりすぎじゃね？」
A 「言えてるー」

わたしはビデオカメラの映像が見れなくなり、顔を覆う。
カラオケのモニターと下手の壁に文字が映し出される。

おーい。

おーい。

だからキミは、

自分の目で見えるものを信じて生きなくちゃ駄目なんだよー。
聞いているかい？

【11】

学校の教室。

スーツ姿の年配の女性教師（以下、茅島）がわたしに声をかける。

その横に学校机には、シオリちゃんが座っている。

先ほどまで無機質に動いていた複数の女子たちも椅子に座っているように見える。

茅島「渋谷さん」

わたし「え？」

茅島「大丈夫？保健室行く？」

わたし「大丈夫です」

茅島「えー、今日の終業式をもって今学期を終了します。よくやったと思うところは大いに評価し、これからも伸ばして欲しいと思いますし、反省すべきところは反省して欲しいと思います。そして明日から、一か月間夏休みに入ります」

※以下、茅島のセリフとシオリコのセリフが同時進行していく。

茅島「計画的に将来への目標を持って過ごし、他人が見ていないところでどうするのかということを考え毎日を過ごして欲しいと思います。このクラスは、今学期不幸なことが起こってしまいました。休み明けの始業式には充実感あるいは達成感をもって登校して下さい。そして来学期からは、先生がこのクラスの担任を引き継ぐことになりました。水野先生の事件は大変心痛いけれど、先生もみんなと一緒に乗り越えていけたらと思います。最後にはなりますが、このタイミングで高野シオリさんが転校することになりました」

わたし「あのお。反省するって、反省してばっかですよ。毎日。それでもまた明日、反省して。そんなの毎日繰り返し返さなくちゃならないんですか。それっておかしいじゃないですか。目標とか将来とか。そんな簡単じゃないじゃないですか。不幸ってやつもそうだ。他人の生きてきたこと、心痛いとか、そんな簡単な言葉で終わらせちゃいけないでしょ。何か違うくないですか。もつとあるでしょう、別の。別の

やつ。シオリちゃん。シオリちゃんが信じた神様って一体何だったの。もしもそれが真つ黒つけの怪物でもいいからさあ。ちゃんと、もっと、何か言ってみよ」

茅 島「(シオリに)一言、みんなにあれば挨拶して」
シオリ「はい……」

カラオケルームに、シヨコがひとり入ってくる。
シヨコは電モクで曲を入れる。

シオリ「シヨコちゃん。好きよ」
シヨコ「(マイクで)わたしも好きだよおおお！」

大音量で、ブランキージェットシティー「赤いタンバリン」(カラオケ)が流れる。

シオリは歌を口づさみながら、複数の女子たちと共に走っていないなくなってしまう。

カラオケと同時進行して、カラオケのモニターと下手の壁に文字が映し出される。

ねえ、

どうせこれだって

わたしの世界なんでしょう。夢見てんでしょ。

だったらもういいから。

わたしはわたし。

わたしだけのものなの。世界なの。

わたしが違うと思ったら違うの。

いつそ世界なんて終わってしまえばいい。

今まで何度もそう思った。でも世界は終わらない。

ほれ見たことか、

神様なんていないんだよ。

カラオケルームに、水野と片桐が掴み合いになりながら入ってくる。

片桐の手には包丁が握られている。

水野は必死に抵抗しながら逃げようとしている。

片桐は泣きながら、悲しそうに何かを叫んでいる。

片桐「わかってくれよ、好きなんだよー」

片桐が水野に馬乗りになる。

水野は必死にお腹をかばいながら逃げようとする。

それを見ていたシヨコが、片桐の頭めがけて、マイクを力強く振り下ろす。

カラオケのモニターに文字が映し出される。

おやすみなさい、おはよう。

暗転

【12】

学校の応接室。

山辺と原が、わたしの様子をうかがっている。

山辺「渋谷先生」

わたし「え？」

原「ちゃんとわたしの話聞いてました？」

わたし「ごめんなさい」

原「まじ何なのー」

山辺「違うの、そうじゃないの」

原「言いましたよね、わたし。親と話して、警察に行って、相手に警告を出してもらうことにしました。なので学校ではこの話を終わらせて欲しいって」

山辺「でも体育のことは何も終わってないよね？」

原「だから、山辺先生は何でそんなに体育にこだわるんですか。体裁ですか？」

山辺「体裁？」

原「わたしが体育に出ないと学校での体裁が悪いんですか？」

山辺「何で体裁？」

原「それ以外の何ものでもないじゃないですか」

山辺「原さん、ちょっと待って」

原「知ってます？ストーカー被害って、警告出した後がいちばん危ない

「んですよ」

山 辺「それはわかってるよ」

原 「相手が逆ギレして。わたしが本当に刺されたらどうするんですか？」

山 辺「何でさっきからわかってくれないの。あなたは」

LINE 着信音が鳴る。

原が携帯電話をいじり始める。

山 辺「こないだも言ったけど、体育の授業ずっと出ないわけにはいかないのね。先生だって成績つけなくちゃいけないし。見学続きになっちゃうと進級にも関わるの。原さん、携帯電話しまつて。ねえ、聞いてる？」

原 「(携帯電話を閉じる) 山辺先生。これ監禁ですよ？」

山 辺「監禁なんてしてないじゃない」

原 「だってそうじゃん。放課後は事務所のレッスンあるんで早く帰るって。これ、いつになったら帰れるんですか？」

山 辺「先生たちはあなたの味方だから。だからこーやって時間を作ってるんだよ？」

原 「わざわざですか。ああ、そうですか」

山 辺「あのさあ」

原 「すいません、親が学校着いたみたいなんで帰っていいですか？」

山 辺「原さん」

原 「味方味方って、味方ぶって結局生徒のこと何も考えてないし」

山 辺「原さん、ねえ聞いて」

原 「結局自分の保身のためじゃん。わたしが何かした？」

山 辺「じゃあ何で歓楽街歩いてるの？」

原 「は？」

山 辺「知ってるんだよ。わたしも渋谷先生も。男の人と何人も」

原 「何もしてないですよ」

山 辺「だとしても、そういうのがストーカーの原因になってるんじゃないの？」

原 「ちよつとそれ問題ですよ？」

山 辺「原さん」

原 「教師がそーいうこと言っているんですか。わたし被害者ですよ？」

山 辺「わかってる、だとしてもさあ」

原 「頭おかしいんじゃないの」

山 辺 「原さん」
原 「帰ります」
山 辺 「原さん」
原 「まじ最悪」

原が立ち上がったって部屋を出ていこうとする。
それを見ていた渋谷が、原の腕をつかむ。

原 「何ですか？」
わたし 「(腕を掴んだまま) 一回座ろうか」
原 「嫌です」
わたし 「(腕を掴んだまま) 駄目」
原 「触らないでよ、嫌だって」
わたし 「(腕を掴んだまま) 駄目！」
原 「触らないでって言ってるの！」

原がつかまれた腕を振り払う。

原 「痛いんですけど！」
わたし 「そーいうこと言えるのに何で？」
原 「は？」
わたし 「そーいうこと言えるのに何で、何も言わずに男の人に自分の身体を触らせるの？」

山 辺 「渋谷先生？」
原 「何言ってるの？」
わたし 「問題なのは全部自分でしよう。自分の勝手に男の人に身体を触らせて、その気にさせて。原さんがやってることは、悲しいんだよ。悲しいことなんだよ」

原 「ちよつと待って。言ってる意味がわかんない」
わたし 「はいよ。殴りなさいよ」
原 「はあ？」
わたし 「むかっているんでしよう。最悪って、むかっているから言うんでしよう？」

山 辺 「先生おかしいですよ」
わたし 「いいんです。(原に) ほら、わたしのことグーで殴りにきなさいよ」
山 辺 「渋谷先生、一旦落ち着こう？」

わたし「殴りなさいよ。むかついてるならもつとぶつかって来なさいよ」

わたしが原の腕を引っ張る。

そこから、わたしと原が引っ張り合いみたいになる。

山 辺「ちよっと！」

わたし「殴ってよ。ほら、殴ってみなってば」

山 辺「ちよっと、渋谷先生！渋谷先生ってば！」

原「やめてよ！」

山辺にふたりが引き離される。

原 「大人のくせに」

わたし「子供のくせに」

原 「はあ？」

音楽が鳴り始める。

山 辺「渋谷先生、落ち着いて」

原 「何これ。この先生、どっかキレちゃったんじゃないの？」

わたし「大人になるとむかつきたくても、むかっけなくなるの！何も言えなくなるんだよ！」

山 辺「ちよっと待って。室先生、室先生呼んでくるから！」

山辺が教室を出ていく。

原 「大人とか子供とか関係なくない？」

わたし「原さんは子供なのよ。まだまだ全然。だからわからないのよ！」

原 「馬鹿にしないでよ！」

再びふたりが引っ張り合いの喧嘩みたいになる。

わたし「そんなんじや、大人になったらあなたもわたしみたいになっちゃうんだよ！わたしみたいになつまらない大人になっちゃうんだよ！」

しばらくして室と山辺が教室に走り込んでくる。

室 「渋谷先生！」

室がわたしを原から引き離す。
そして、室がわたしの手を掴む。

室 「(手を掴んで) 何やってるの！」

わたし 「(振り払って) 触らないで」

室 「(もう一度つかんで) 渋谷先生」

わたし 「(もう一度振り払って) 嫌」

室 「(もう一度つかんで) 渋谷先生」

わたし 「(もう一度振り払って) 嫌」

室 「(もう一度つかんで) 渋谷先生！」

わたし 「(もう一度振り払って) だから嫌だって言ってるでしょ！」

室 「どうしたの」

わたし 「どうもしてない」

室 「おかしいよ」

わたし 「おかしくない」

室 「教師でしょ」

わたし 「自分だってじゃん」

室 「俺？」

わたし 「自分だって教師じゃん」

室 「だからどうしたの」

わたし 「わたしに嘘をついてるのに、何で平気な顔をしてそんなことを言えるの？」

室 「嘘って何が？」

わたし 「何でおしっこ撮影してるの？」

室 「え？」

山 辺 「おしっこ？」

わたし 「見たよ、携帯。制服の女の子に、ホテルで。おしっこしやーしやーさせてるの、何で？」

室 「あれは…」

わたし 「ねえ、もしかして学校のトイレも室先生なの？そーいうの趣味だったの？」

室 「それは違う」

わたし 「嘘」

室 「嘘じゃない」

わたし 「嘘」

室 「嘘じゃないって」

わたし 「じゃあわたしは室先生の何を信じたらいいの？」

室 「何って」

わたし 「目で見えてるあなた？それとも、わたしが信じてるあなた？」

室 「どっちも俺だよ」

わたし 「言ったよね、わたしに、いま。教師でしょって。でも自分だって教師じゃん」

室 「だから学校は俺じゃないよ」

わたし 「ホテルならいいの？」

室 「そうじゃない」

わたし 「じゃあ他校の生徒なら？それともわたしが知らない制服の女の子なら？ねえ、お金払ってるの？何ならいいの？」

原 「……」

わたし 「少し考えたらわかるじゃない。こんなことしたらわたしと先の結婚とかそーいうのも、全部駄目になっちゃうことぐらい。それなのに何で？」

室 「それは……」

わたし 「こうなっちゃったのが、わたしがあなたを全部受け入れてあげられなかったから。そのせいだっていうのもわかってるけど。何で風俗とかそーいうものでなくて生徒なの。何でそっちにいつっちゃったの？」

室 「(手を掴もうとして) ちょっと待ってよ。(ここでやめようよ)」

わたし 「だから触らないで欲しいの！」

原が応接室を飛び出していく。

山 辺 「原さん！」

山 辺が原を追いかけて、応接室を出ていく。
入れ替わりに、カラオケルームにシヨコとカラフルな傘を持ったシヨコが入ってくる。

室 「シヨコちゃん」

※以下、過去と現在のセリフが同時進行していく。

シオリ「シヨークちゃん」

シオリが持っていた傘を広げる。

シオリ「見て見て」

シヨーク「どうしたの、それ？」

シオリ「何か降ってきそうな感じだったから。さっき買ったよ」

シヨーク「今日、天気晴れだったよ」

シオリ「でもいっぱいお小遣いもらったから」

シヨーク「誰から？」

シオリ「じゃあわかった。わたしが漫画描くの手伝ってあげる」

シヨーク「いいよ」

シオリ「(渋谷の漫画を掴んで) いいからいいから」

シヨーク「いいよ、いいって。(シオリを振り払う) いいってば！」

わたし「わたしわからないの。いま、自分がどうしたらいいのか。どうした
いのか。でも原さんのことも、室先生のことと許せないの。すつご
く、すつごく」

室 「原さんと俺は何もないじゃない」

わたし「あってもなくても、同じなの。わたしにとってみれば何も違わない
の」

室 「違うって、それは」

わたし「何でだろうなあ。いつもわたしは上手く言葉にできなくて、でもや
っぱり、あの時、いいよって、あの子の神様になってあげなくちゃ
いけなかったんだと思うの」

室 「神様？」

シオリ「(笑顔で) じゃあ、うちの親殺してよ」

シヨーク「……何、言ってるの」

シオリ「だよね？」

シヨーク「何でそーいうこと平気で言えるの？」

シオリ「こんなの妄想じゃん」

シヨーク「でもそれって違うじゃん。嘘じゃん」

シオリ「それがシヨークちゃんにとって嘘になっちゃうなら、嘘だね」

ショーコ「そうだよ、そんなの、ただの嘘だよ」

わたし「昔ね、すっごい可愛い女の子と友達になって、その子に、うちの親殺してよ、って言われたことがあったの。もう嘘かどうかなんてわかんなくて。でも怖くて。とりあえず断って。そしたら、担任の先生が彼氏に刺されて死んじゃって。いちばん仲良かった子とも喧嘩したまま全然声かけられなくなっちゃって。全部が壊れちゃって。そのうち、うちの親殺してよって言ったあの子も他の学校に転校しちゃったんだよね。でも、あの時、わたし何が起こってたとか、どうしたらいいとか全然わからなくて。でも、大人になったから、わかっちゃって。何となくだけ。全部、わかる気がしちゃって」

宙から、真つ赤な羽根がひらひら舞い落ちてくる。

シオリ「わたしもういらなから。全部。そのかわりさ、わたしの漫画描いて。たぶん、そのうち、わたしの人生がすっごいリアルでもって、ショーコちゃんの前に現れるからさ。そしたら、ちゃんと描いてよね。漫画」

ショーコ「そのうちっていつ？」

シオリ「ノストラダムスの大予言で、人間はみんな死んじゃうんだって。だからその前？」

ショーコ「死なないよ。ノストラダムスも嘘だもん」

シオリ「でも何か降ってくるかもしれないよ。怪物みたいな、恐怖の大王が」ショーコ「ないよ。空からは何も降ってこない」

シオリ「それってつまんないね」

わたし「こないだ、あの子どうしてるんだらうって、ヤフーでその子の名前を検索してみたんだ。会いたかったし。結婚するから、招待状とか出したくて。そしたら、死んでた。その子。お母さんに監禁されて男ふたりがかりで暴行されて。わたし信じてあげれば良かったんだよね。きつとふたりにはどうでもいいことなんだけど、わたし誰も守ってあげることができない子供だったから。でもいちばんかっいいオチは、シオリちゃんのことを守ってあげなくちゃいけないかっただんだと思うの。何があっても信じて。ももちゃんのこと裏切らないで。それが出来なかった自分が、わたしは何をやってたんだらうって。子供のわたしは何をやってたんだらうって。何やってたんだらうって」

室がわたしの腕をつかむ。

真っ赤な羽根が降る中、わたしと室が掴み合いになる。

ふたりは必死にお互いを捕まえて、逃げてを繰り返す。

室 「腕をつかんで」 ショーコちゃん」

わたし 「(振り払って) 嫌」

室 「もう一度つかんで」 ショーコちゃん」

わたし 「(もう一度振り払って) 嫌」

室 「(もう一度つかんで) ごめん、ショーコちゃん! ごめん!」

いつの間にか、わたしが室の胸の中で大泣きをしている。

わたし 「だいつきらい。だいつきらい!」

シオリがもう一度傘を広げて現れる。

ショーコ 「シオリちゃん」

シオリ 「わたし、ショーコちゃんのこと好きよ」

ふたりは真っ赤な降りしきる羽根の中に埋もれていく。

わたし 「だいつきらい! だいつきらい!」

わたしは室の胸の中で泣き続けている。

暗転

【13】

カラオケルーム。

大人になった百瀬と漫画雑誌の編集者(以下、御徒町)が、無言のままソファに座わっている。

ふたりの目の前には、漫画の原稿がある。

御徒町 「すごいウルトラスーパーミラクルですよ。百瀬さん。ヤバイです」

百瀬「それ褒めてくれてる？」

御徒町「褒めてますよ。ある意味、才能ヤバイ。超下級でつまんない」

百瀬「ウルトラスーパーミラクルって言ったじゃーん」

御徒町「だからある意味ですって。なかなかこんなイケてないセリフ描けないですよ」

百瀬「何よー」

御徒町「はい、ネームこれでオッケーですから」

百瀬「あー、また監禁生活かー」

御徒町「すいませんけど。メ切よろしくお願いします」

百瀬「もう伴侶が欲しい。結婚したい」

御徒町「売れてお金で買ったらいんじゃないですか？」

百瀬「(ダイナミックな動きと共に、御徒町を攻撃する) ムーンブリズム
パワーメイクアップ！」

御徒町「冗談ですって。びっくりしたー」

百瀬「月に代わってお仕置きよ」

御徒町「やめて下さいよ、もう。痛てー」

百瀬「痛くやってるから」

御徒町「最悪ですよ」

百瀬「ほんとは少女漫画やりたかったんだけどねー」

御徒町「いや、いいんじゃないんですか。百瀬さんのノリ、うち好きなんです」

百瀬「ヤバイヤツ出てくるような漫画しか描いてないんだけどねー。わたし」

御徒町「百瀬さん、全部爆発させちゃうからなあ。最終的に」

百瀬「あれ、一応、社会へのアンチテーゼのつもりでやってんだよ？」

御徒町「わかんないわかんない。うちの読者、頭悪いんで」

百瀬「そういうこと言っていると、ぶっ殺されるよ？」

御徒町「頭おかしいやつ多いですからね、今」

百瀬「それ、ほらー」

御徒町「いやいや、何か歌います？」

百瀬「中島みゆきと岡村靖幸。あと、きやりーばみゅばみゅ」

御徒町「つつこみどころ多いですね」

百瀬「あんた殺すよ？」

御徒町「怖えええ」

百瀬「あー。面白い漫画描こー」

御徒町「そういえば犯人捕まりましたね。○○○○(タイムリーな事件)」

百瀬「そうなの？」

御徒町 「やってんじゃないですか。テレビで」

百瀬 「わたしテレビ好きじゃないから」

御徒町 「そうなんですか？」

百瀬 「なんか、ちよつと。あんまり見ないの」

御徒町 「そうですねー。上っ面だけで中身っていうか、実際何でそういう事件になったかってほとんどやんないし。結局ネイバーまとめの詳しくくて」

百瀬 「確かに、ネイバーまとめすごいよね」

御徒町 「絶対あれやってるやつら暇ですよー。いい加減に、人様のことを」

百瀬 「……そう考えると、ほんんと、みんな性格悪いね」

御徒町 「所詮他人ですから。何っーか、そういうのを神の視点で見ちゃって
ますからね。うちら」

百瀬 「ねえ」

御徒町 「はい？」

百瀬 「じゃあ、何やってんだと思う？神様って」

百瀬のセリフをかき消すように、御徒町の携帯電話が鳴る。

御徒町 「あ、すみません。ちよつと出ます。(電話に出る) はいもしもし。

ああ、お疲れさまです。大丈夫ですー。はい、ちよつと。ちよつと

待ってくださいね。(百瀬に) 歌入れててください。先に」

御徒町が電話をしながら部屋を出ていく。

ひとりになると百瀬は、煙草とライターを取り出して火をつける。

しばらくぼんやりと煙草を吸う、間。

そして電モクで曲を入れるとカラオケソングが流れる。

イントロが始まり、Aメロが始まろうとすると、カラオケルームの扉がノックされ、シヨークが部屋に入ってくる。

シヨークがコーラの注がれたグラスを、百瀬の前に置く。

シヨーク「(百瀬を見る) ……い「ゆっくりどうぞー」

シヨークが部屋を出て行く。

百瀬が追いかけて部屋を出ていく。

暗転